

訂再  
新青年讀本

廣島縣教育會編纂

三

教科書文庫  
4  
810  
44-1928  
2000068984

43403

教科書文庫

4
810
44-1928
20000 68984

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

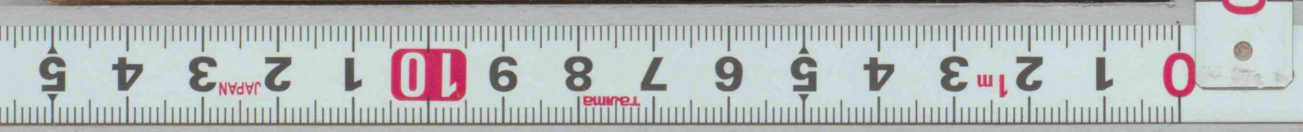
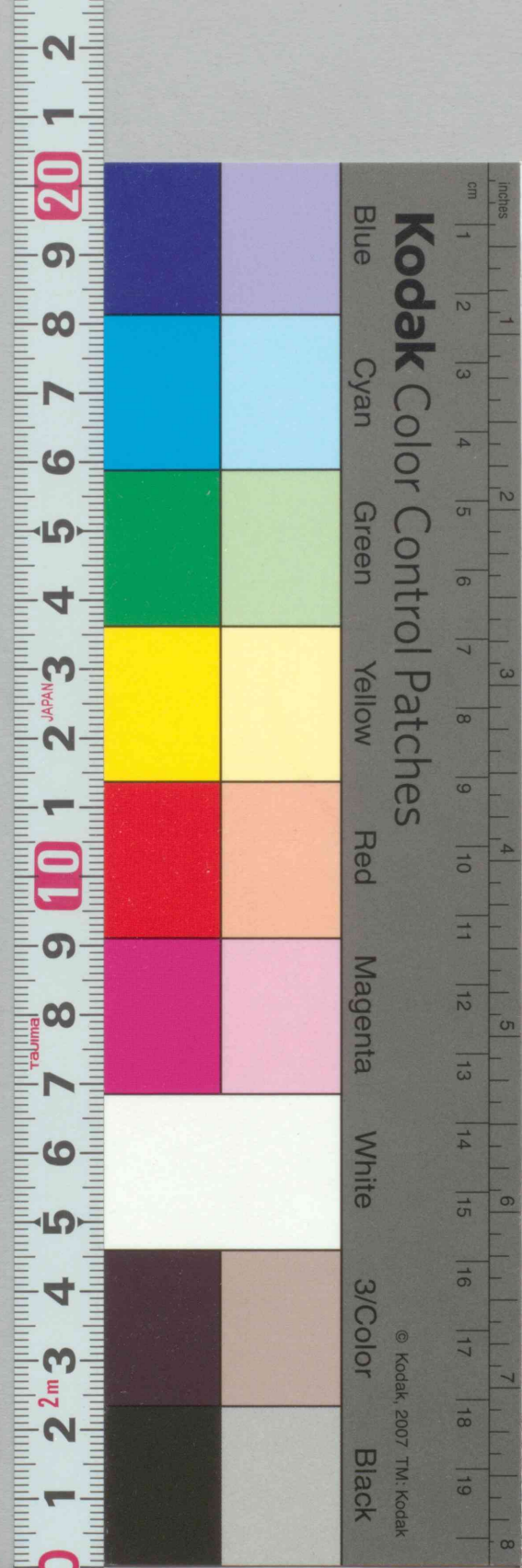


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





中央図書館  
資料室

4C  
810  
BB3

教科書文庫  
4  
810  
44-1928  
2000068984

廣島縣教育會編纂

再訂  
新青年讀本

三

廣島 積善館發行



広島大学図書

2000068984



詔書

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ  
之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス是ヲ以テ先帝  
意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ基キ淵源ニ遡リ皇祖皇宗ノ  
遺訓ヲ掲ケテ其ノ大綱ヲ昭示シタマヒ後又臣民ニ詔シテ忠  
實勤儉ヲ勸メ信義ノ訓ヲ申ネテ荒怠ノ誠ヲ垂レタマヘリ是  
レ皆道德ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪謨ニ  
非サルナシ爾來趨向一定シテ效果大ニ著レ以テ國家ノ興隆  
ヲ致セリ朕即位來夙夜競々トシテ常ニ紹述ヲ思ヒシニ俄ニ  
災變ニ遭ヒテ憂悚交々至レリ



輓近學術益開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ習漸ク萌  
シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスンハ或ハ  
前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル況ヤ今次ノ災禍甚タ大ニシテ文  
化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツチャ是レ實ニ上  
下協戮振作更張ノ時ナリ振作更張ノ道ハ他ナシ先帝ノ聖訓  
ニ恪遵シテ其ノ實效ヲ舉クルニ在ルノミ宜ク教育ノ淵源ヲ  
崇ヒテ智德ノ竝進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ浮華放  
縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸  
シ人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致シ公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任  
ヲ重シ節制ヲ尙ヒ忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ博愛共存ノ誼ヲ篤ク  
シ入リテハ恭儉勤敏業ニ服シ產ヲ治メ出テテハ一己ノ利害

ニ偏セスシテ力ヲ公益世務ニ竭シ國家ノ興隆ト民族ノ安榮  
社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ朕ハ臣民ノ協翼ニ賴リテ彌國本ヲ  
固クシ以テ大業ヲ恢弘セムコトヲ冀フ爾臣民其レ之ヲ勉メ  
ヨ

### 御名御璽

### 攝政名

大正十二年十一月十日

內閣總理大臣  
各省大臣



## 凡 例

- 一 本書は實業補習學校並に青年團の國語教科書に充てんがために編纂したるものにして、分ちて四卷となす。
- 一 本書は主として國民精神の陶冶、文學趣味の啓培、公民的知識の涵養、愛郷心の育成に資すべき材料を選びたり。而して漢文の讀方も一通り辨へ置くの要ありと信するが故に、卑近なる漢文、並に諷誦に値すべき漢詩數首を採録したり。
- 一 本書に自修文を加へたるは、教授以外に於て生徒自身に學修せしめんがためなり。
- 一 文中の難讀語句には傍訓を附し、上欄には略解を施し、且つ文



法上注意すべきものは特に之を掲記したり。

大正十三年九月

廣島縣教育會

改訂 新青年讀本 卷三

目次

一 明治神宮……………溝口白羊……………一

二 春の詩……………夏目漱石……………九

三 青年と在郷軍人……………田中義一……………三

四 果物……………横山健堂……………七

五 閉塞隊の出發に臨みて……………廣瀬武夫……………三

六 日本海の大戦その一…………………………三

七 日本海の大戦その二…………………………元



八 農村青年に望む……………徳富蘇峰…三

九 中央公園……………厨川白村…三

一〇 川柳……………四

一一 災都より大阪へ(自修文)……………福馬謙造…五

一二 帝釋峽の眞價値……………國府、犀東…五

一三 地方自治……………竹越與三郎…六

一四 晝の農夫……………島崎藤村…六

一五 南洲遺訓……………西郷隆盛…六

一六 短歌……………七

一七 ナポレオンの最期……………七

一八 ロイド、ジョージ(自修文)……………河上肇…七

一九 平和は成れり……………近衛文麿…七

二〇 狂歌……………九

二一 大石良雄その一……………山路愛山…一〇

二二 大石良雄その二……………山路愛山…一〇

二三 義士泉岳寺へ引揚ぐ(自修文)……………大町桂月…一三

二四 法律と裁判……………坂谷芳郎…一六

漢文漢詩數篇

附 録



再訂 新青年讀本 卷三

廣島縣教育會編纂

一 明治神宮

溝口 白羊

溝口白羊  
名は駒吉、早  
稲田大學出身  
の文章家。

明治神宮がいよゝ、竣工を告げた。

曾て赤土の露出して居る上に、鋭く尖つた切石が幾箇も  
列んで、烈しい日に光つて居るのが見えた處は、今清々しい  
色の小砂利を敷詰めた參道の白い線が、常緑の森の中に長  
く續き、其の以前疎らな松林の中から、耕地の廣く展開して  
居るのが見渡された御料地は、いつの間にもやら全然見ちが  
へる程美しい景色に成つて、崇嚴と幽邃との趣を兼備へた

幽邃  
いひな。

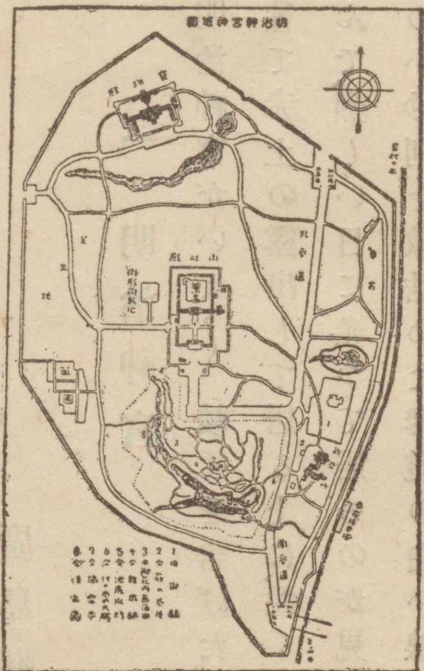


う。したのだら。

鬱蒼たる密林の中から、所謂流造素木の神殿の隠顯するの  
が、何とも云へない神々しい感じを起させる。

果して何者の力が此の新しい建設を完成したのだらう。

一萬九千本であると云ふやうなことが、細密な数字的計  
算に基づいて書いてあるが、さう云ふ数字を高く超越して、  
接造營の事に當  
つた延人員が百  
數十萬人であり、  
用材の總計が尺  
上には、大正四年  
四月起工以來直  
造營局の記録の



明治神宮神域圖

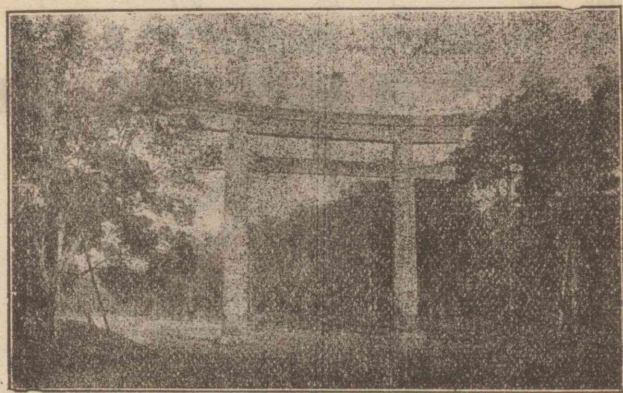
懿德  
美しく大なる

に隠れた部に働いた強い力が無ければならぬ。明治天  
皇の御聖徳と、昭憲皇太后の御懿徳とそして此の二柱の大  
神の御恵にこたへ奉る國民の感謝の至情と、この三つのも  
のこそ此の記念すべき大工事を完成するに至らしめた原  
動力である。

嗚呼。至純な動機から出た青年團の造營奉仕、數百里の  
遠隔地方から眞心を籠めて輸送して來た無數の獻木、それ  
が何事を語つて居るか。實に此の神宮の御苑を形成する  
一本の樹、神殿を組織する一本の柱にも、悉く國民の燃える  
やうな熱誠が籠つて居るのである。斯くして殆ど全く國  
民の誠意を以て完成した其の宮居に、國民崇敬の標的たる  
明治天皇・昭憲皇太后の御靈が宿らせ給ふのである。何と



いふ美しい尊い事實だらう。



明治神宮參道

今までの神社に曾て見た事のない明治神宮の特色は、實にこゝに在るのである。私は表參道を一直線に進んで神宮橋畔第一鳥居の前に來て遠く神域の中を望み見た刹那に、第一に此の事を直感した。そして一步步々美しい小砂利の上を神殿に近く踏入るに随つて、彌、肅然たる心持に成つて深く襟を搔合せた。御社殿は樓門・拜殿・本殿等の建物を合せて、其の總坪數六百五十坪、本殿は全部木曾御料林産の

崇高な感じ  
け高い感じ。

檜材を以て造つたもので、近く拜殿に上つて拜すると、芳ばしい檜の香氣が深く鼻を撲つて、如何にも神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して奥は、即ち神靈のおはします内々院で、衆庶の慢みだりに窺ふことを許されない神聖の場所である。

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるゝ。

私は默禱を終ると初めて向うを見た。

まあ何といふ快い感じを持つた社殿だらう。今までに見た大抵の社殿が、皆暗い周圍から來る鈍い光波の中に靜寂な併し陰鬱な感じを漂はせて居る中に、此の神宮ばかりは隠す所のない心持で、十分な光線に總べてを解放し、總へ

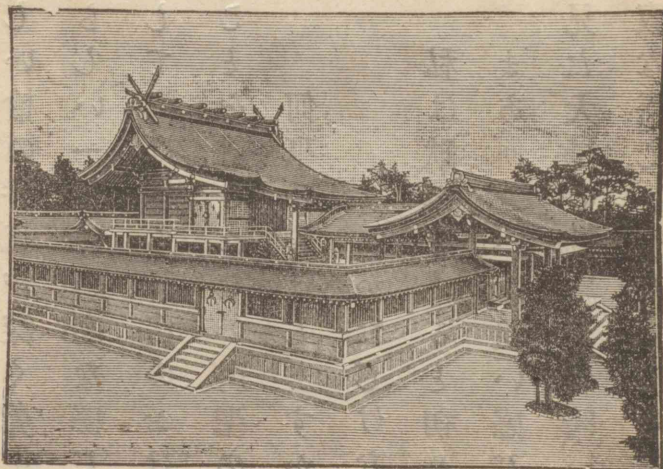


譬へ。

てを暴露して見せてゐる。

然もそれでゐて決して淺薄な心持はせず、却つて一層深く大きくされた靜寂の中から譬へやうもない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と頭を下げさせるやうな強い威力が迫り寄るのを覺えるのだ。

弊を排除して、國民と近く接觸し國民と親しく協力して、新



明治神宮本殿

これでこそ明治天皇の神靈を奉祀した宮だと云ふ事が出來ると、私はさう思つた。久しく宮廷に蟠つて居た一切の舊

と吸収しよう

あるやうで

文明を吸収しようとして遊ばされた明治天皇の、活動的な進取的な潤達の御氣象に對して、如何にも其の明るいお宮の感じが、ピツタリと呼吸を合せてゐるやうで嬉しく思はれた。

私は寶物殿まで來ると、再びもと來た道を表參道の榭形に近い社務所の邊まで引返した。此の邊、左右の兩側にある古雅な木柵を廻らした一構は、即ち明治天皇、昭憲皇太后の深い御由緒を留めてゐる舊御苑で、御苑内の建物は舊御殿と云ひ、舊御茶屋と云ひ、いづれも極めて御質素なものばかりであるが、お庭は實に田園の自然の景色其のまゝの面白いもので、殊更技巧を弄しない所に、何とも云へない優雅な趣を帯びて居る。此の御苑は祭神二柱が御存生中、殊に



御賞愛遊ばされた所で、大空高く聳えて居る松を背景にした芝生の上に、點在してしをらしく咲いて居る萩の花の幾株にも、熊笹の一面に生茂つた丘の上に連り續いて居る櫟くわいや榎えのの雑木林にも東京近郊では到底見る事の出来ない野趣がある。

昭憲皇太后が特に御賞觀あらせられたと云ふ菖蒲田や、今上陛下が東宮時代に行啓あらせられた時に、屢、御飲み遊ばしたと云ふ清正井の名泉、代々木の村名の起原であると云ふ大木の縦も此の御苑内にあるのだ。

私は其の一つくを拜觀して廻つて、涙ぐましい程の強い感激に打たれながら、夕暮近くなつたので御門を出た。振返つて見ると神殿のあたりは、すつかりもう深い霧きりに

包まれて、黒々と晝でも暗いほど生茂つて居る樹林の中を、劃然と切開いたやうに、路線の白い色が暮残つて續いて見えるのが、妙に嚴肅な氣分を起させた。

私は今にして初めて明治神宮の鎮座地として、代々木が選ばれた事の偶然でないのを知つた。(明治神宮記略抄)

夏目漱石  
前出

二 春の詩

夏目漱石

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、どこで鳴いて居るか、影も形も見えぬ。たゞ聲だけが明かに聞える。せつせと忙がしく、絶間なく鳴いて居る。方幾里の空氣が、居たゞまれない様に氣をそゝる。かの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。長閑な春の日を鳴きつくし、鳴



きあかし、又鳴きくらさなければ氣が濟まんと見える。その上何處までも登つて行く、何時までも登つて行く。雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違ない。登りつめた擧句は、流れて雲に入つて、漂つて居るうちに、形は消えてなくなつて、たゞ聲だけが空の裏に残るのかも知れない。

巖角が鋭く廻つて、按摩なら眞逆様に落ちる所を、際どく右へ切れて、横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあそこへ落ちるかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛びあがつて來るのかと思つた。次には落ちる雲雀と揚る雲雀とが十文字にすれ違ふだらうと思つた。最後に落ちる時も揚る時も、また十文字にすれ違ふ時にも、元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて、正體がなくなる。たゞ菜の花を遠く望んだ時に、眼が覺める。雲雀の聲を聞いたときに、魂のありかゝ判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたものゝうちで、あれほど元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

忽ちシエレーの雲雀の詩を思ひだした。口のうちに諳誦して見たが、覺えてゐる所は僅か二三句しかなかつた。前を見ては、後へを見ては物欲しとあこがるゝかな、われ。腹からの笑といへど、苦しみのそこにあるべし。うつく

シエレー  
英國の詩人。  
一八一八—一八三〇。



萬斛の愁  
極めて多くの  
憂

超俗  
俗氣をはなれ  
た事

しききはみの歌に、悲しさのきはみの想、籠るとぞ知れ。成程いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の様に思ひきつて、一心不亂に前後を忘却して、わが喜を歌ふわけには行くまい。西洋の詩は無論のこと、支那の詩には、よく萬斛の愁など云ふ句がある。して見ると、詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神経が鋭敏なのかも知れん。超俗の喜もあらうが、無量の悲も多からう。そんならば詩人になるのも考へものだ。

しばらくは路が平で、右は雜木山、左は菜の花の見つけである。足の下に時々蒲公英を踏みつける。鋸の様な葉が遠慮なく四方へおして、まんなかに黄色な珠を擁護して居る。菜の花に氣をとられて、踏みつけたあとで、氣の毒な

ことをしたとふりむいて見ると、黄色な珠は依然として鋸のなかにすわつて居る。(草枕)

### 三 青年と在郷軍人

田中義一

田中義一  
山口縣の人、  
陸軍大將、  
前陸軍大臣

元來軍隊教育は最終の國民教育で、其の教育方針は所謂良兵・良民主義である。即ち軍隊教育は戦闘に堪能な良兵を作ると同時に、良民を養成することを根本の方針としてゐる。凡そ世に處し事を行ふには、常に誠忠・殉國の大節を持ち、人に接しては信事に臨んでは勇上を敬し下を惠み、質素で以て家を齊へなければならぬ。さうして之を貫くに一誠を以てしたならば、社會國家の一員として誠に申分なく、名を成し家を興すのも實に易々たる業である。



然るに右の忠節・禮儀・信義・武勇・質素の五箇條は、軍隊教育の大精神で、軍隊教育は何もかも皆この大精神に基づいて施され、其の上事業の母とも云ふべき體軀の鍛鍊に力を注ぎ、且又退營後に於ける一身處世の必要を顧慮して、軍務の餘暇には、將來の事業に應ずる準備教育までも施すことになつて居る。故に軍隊教育によつて出來上つた精銳な戰士は、即ち平時に於ける模範國民である。随つて在郷軍人は國民の模範を以て自ら任じ、郷黨の青年を善導・扶掖するの資質を備へ、且その責務を負うて居ると云はなければならぬ。されば後輩青年は其の指導を受け、其の範に則らなければならぬ。此の事に關して、軍隊教育令には、次の如く教へられてある。曰く、軍人ハ國民ノ精華ニシテ其ノ

扶掖  
助すける。扶

郷黨  
村の仲間。  
閭里 村里。

儀表 てほん。  
摯實 まじめ。

光芒陸離  
ル輝燦爛たる  
有様  
秋水 刀劍。

首要部ヲ占ム。從ツテ之ガ教育ノ適否ハ、直ニ以テ郷黨閭里ノ風尚ヲ左右シ、國民精神ニ偉大ノ影響ヲ及ボスモノナリ。蓋シ軍隊ニ於テ修得セル無形上ノ資質ハ、以テ社會ノ風潮ヲ向上スベク、國民ノ儀表トナリ、摯實剛健ノ氣風ヲ馴致シテ、國家ノ隆興ヲ増進シ得ヘケレバナリと。斯くして在郷軍人の活躍と、後進青年の興奮とが相俟つてやつて行つたならば、期せずして青年の習俗が善良となり、氣風が向上するのである。さうして聽て此等の青年が軍隊に送り込まれるのであるから、軍隊は最初から立派な軍人原料の供給を受ける事になる。既に原料が良好である以上、軍隊に於て立派な教育を施せば、茲に光芒陸離たる秋水が鍛へ上げられるのは疑のない事である。さうして此の名刀は



再び社會に出て社會・郷黨を善化利導する武器となるのである。斯くして循環して已まなければ、一面には立派な戦士が得られ、他面には善良な國民が得られて、茲に帝國の萬萬歳を祝福し得る譯である。

歐米諸國では、軍隊と一般社會との間の物質的連繋が極めて圓滿であるが、それは兩者の生活狀態が殆ど同様である上に、武技等も國民的遊戯として盛に流行して居るからである。之に反し我が國では、軍隊と一般社會とは其の起居の狀態に大懸隔がある上に國民の軍事思想は一般に幼稚で、軍事的技藝は今でも甚しく不振の狀態にあるのは、軍國のため誠に遺憾である。そこで此の有形的方面の連繋を密接ならしめる事に力を注ぐ事が必要であるが、之は一

朝一夕に望まれない事であるから、此の缺陷を補ふ爲には是非とも無形的方面の連繋を大に密にしなければならぬ。約言すれば、新入兵は入隊の時、既に立派に軍人的精神を有つて居る様になりたものである。

### 四 果物

横山 健堂

夏の初は、青梅こそ心地よきものなれ。青葉の繁れる枝に眞青の實の珠をなせる、美しといふにはあらねど清々し。櫻實さくらんぼの涼趣は、全く青梅と相反す。青梅は二三顆小皿に盛るによろしく、これは累々數十顆を盤にし、光彩陸離たらしむるに妙あり。

「林檎食うて牡丹の前に死なむ哉。」子規のこの句、歿前四

横山健堂  
名は遠三、山口縣の人文學士。  
こそ……なれ

累々  
多く重なつて居る狀。  
食うて  
正岡子規は明治の俳人。松山の人。

### 四 果物



津々  
あふれこぼれ  
る状。

芭蕉、蕪村こ  
もに徳川時代  
の俳人。

風貌堂々  
雄大な姿

五年頃に成りしものなり。水菓子すいしの詩史に子規の名を逸すべからず。林檎の味必ずしも梨を壓するに至らず。然れどもその大にして美なるは津々つづとして詩趣を生ず。詩人の食物とすべきは林檎なるべし。林檎は舊日本にはなし。その味にも亦新日本の特調あり。芭蕉蕪村に梨の味ありとせば、子規の句には林檎の味あるを覺ゆ。人の未だ夏に馴れず、水菓子の拂底なるとき、夏橙市場に出づ。風貌堂々、殆ど八百屋の店頭を壓す。帝都の人は葉蔭に薰れる夏橙を知らず。濃緑の葉の繁れる枝に、この實の金色に輝く夕庭に水打つて月の昇るを待つ、這般の涼趣、片田舎の特有なるべし。夏橙は見るばかりにても涼味あり。その肉味の美なるものほど、外に光澤の麗しきものあり。

松下村塾  
長州萩にあり  
し吉田松蔭の  
家塾。

芭蕉の句。

凋落  
しほみおちる

甜美  
味の甘くうま  
いこと。

り。夏橙の本場は長州なり。松下村塾しやうかそんじゆくを環りて夏橙の薫ずるあり。松蔭先生は夏橙の畑の草を抜きつゝ、その門人を教へたるなるべし。バナ、と鳳梨との詩趣は新體詩のものなるべし。この兩者舊日本になし。その詩趣も舊詩歌に求めがたし。東洋に於ける果物の、文學に最も豊富なるは桃なり。而して桃太郎に至りては即ち御伽噺の國民的なるものなり。「枯枝に鳥のとまりけり秋の暮」の一句能く俳壇の舊套を道破す。而してこの句を想へば、晩秋の天、萬木凋落して、紅柿ばかり枝に残れる畫趣眼前に浮ぶ。予輩は柿を推して日本の果王とするに躊躇せず。甜美てんびにして豊滿なるその肉。黄葉の疏らなる大木に紅く熟したる、食ふべく、晝くべ



く、古來果物の第一なり。柿は枝を添へたるがよし。小さく圓きものは殊に束を重ねて山のみやげとするによろし。苺は極めて心地よきものなり。かの紅玉の燃ゆる面より涼味の涌きいつるこそ殊に面白けれ。これを玻瓈皿に盛りて、純白の砂糖をかくれば、満開の紅梅に曉雪のふりかかれる趣あり。

月の雫  
葡萄の名。  
神往  
心行く、恍惚  
とする。

甲州は葡萄の國なり。月の雫の一語、人をして神往に堪へざらしむ。山に水晶あり地、に月の雫あり。吾が輩未だ甲州を見ざれども、東海道の富士川を渡るごとに、水源なる美しき國を想像す。藤棚と葡萄棚とは、屋外にあるべき家庭の棚ならずんばあらず。藤は白花をよろしとし、紫は葡萄に譲るべし。葡萄棚を茶の間の外に築きて、そのさがれ

仙味  
仙人めいた味。

る房に夏の風を楽しみ、秋の月を迎ふる、亦清き楽しみなり。柘榴は花も葉も餘り引立たず。唯その實、日本畫によるしく、油畫によるしく、これを盆栽にして花よりも畫趣あり。柘榴の小粒は極めて美し。その味も亦清冷、仙味第一たるべし。

廣瀬武夫  
海軍中佐。明治三十七年三月二十七日歿年三十七。

### 五 閉塞隊の出發に臨みて 廣瀬 武夫

閉塞  
ふさぐ。  
先考  
死亡した父。

第一次旅順口閉塞の舉に對し、先考と山縣先師(山縣小太郎)とに代り武勇絶倫の賞詞を賜ふ。此の賞詞は他の千萬人のあらゆる稱讚の辭にまして、弟の最も榮とする所なり。而して友情切々、上士の功に誇らざるを訓へ、更に有終の美を濟さんことを望ませらる。感激の至に勝へず。

有終の美を濟す  
立派に終を完うすること。

### 五 閉塞隊の出發に臨みて



今や第二次閉塞隊として福井丸に上らんとす。賜ふ所の手書は、先考の眞影と共に收めて懷に在り。弟は天祐を確信し、再び其の成功を期すると共に、武士として決して家名を汚すことなきを自信す。

七生報國。

一死心堅。

再期成功。

含笑上船。

愈、御武運の長久ならんことを祈る。再拜。

明治三十七年三月十九日

兄上様

頑弟武夫



廣瀬中佐と杉野兵曹長との銅像  
(東京市神田)

傳家一脈  
我家には一す  
ちの忠義の遺  
風が傳はつて  
居る。

五月二十七日  
八日  
明治三十八年  
なり。

戦うて  
第二第三艦

第二艦隊は十  
月バルチック  
海軍の軍艦を  
迎て喜望峯を  
離り、第三艦  
隊は二日海を  
航解して東に  
へり。

第一次閉塞に際し、八代兄(六代)其の寫眞を贈つて形影相伴ふの意を寓せらる。今回も同じく收めてポケットにあり。

勤王大義太分明。報國丹心期七生。

傳家一脈遺風在。盟舉名聲弟與兄。

寄家兄言志

弟武夫

幾回いふも志は同じ。弟は七生人間滅國賊の楠氏兄弟の精神を以て我が精神と心得候。(廣瀬中佐詳傳)

### 六 日本海の大戦 その一

天佑に依り、わが聯合艦隊は、五月二十七日、八日、敵の第二、第三艦隊と日本海に戦うて、遂に殆どこれを撃滅するを得た



信濃丸  
假裝巡洋艦々々  
長大佐成川揆  
東水道  
對馬と本土との間。

片岡艦隊  
中將片岡七郎の率ゐたるも

東郷戰隊  
少將東郷正路の率ゐたるも

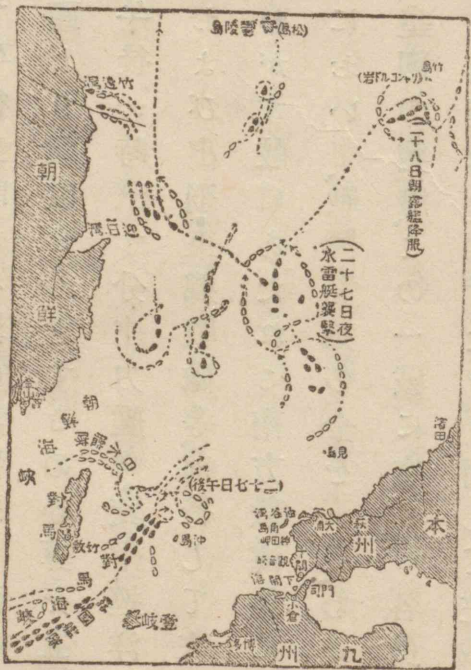
出羽戰隊  
中將出羽重遠の率ゐたるも

り。  
はじめ敵艦隊の南洋に出現するや、上命に基きこれを近海に迎撃する計畫を定め、朝鮮海峽に全力を集中して、徐に敵の北上を待ちしが、敵は、一時安南沿岸に寄泊したる後、漸く北行し來れるを以て、豫定の如く數隻の哨艦を南方に配備し、各隊は一切の戰備を整へ、直に出動し得る姿勢を保持したり。

果然二十七日午前五時に至り、哨艦信濃丸の無線電信は、「敵艦見ゆ。東水道に向ふものゝ如し。」と警報せり。全軍踊躍、直に對敵行動を開始せり。

午前七時、哨艦和泉亦敵の北東に航進するを報じ、片岡艦隊、東郷戰隊、續いて出羽戰隊も、午前十時十一時の交、壹岐對

島の間より、沖の島附近に至るまで、時々敵の砲撃を受けつつ、終始よくこれと接觸をたもち、詳に敵情を電報せしかば、



戰艦航跡圖

海上濛氣ふかく、展望五海里以外に及ばざりしこの日も、數十海里を隔てたる敵影、恰も眼中にうつれるが如く、既に敵の戰隊は、その

第二、第三艦隊の全力なること、その陣形は、二列縦陣にして、その主力は、右翼の先頭に立ち、その他の艦船約七隻は、その



瓜生戰隊  
中將瓜生外吉  
の率ゐたるも

壓(土)

後尾に續けること、その速度は約十二ノットにして、なほ東北に航進せること等を知り、本職はこれにより、わが主力を以て、午後二時ごろ沖の島附近に、敵を迎へ、まづその左翼の先頭より撃破せんとするの心算を立つるを得たり。

午後一時三十分、主力艦隊・装甲巡洋艦隊・瓜生戰隊・各驅逐隊および出羽・東郷戰隊等、前後して來り會し、暫時にして、正にわが左舷にあたる南方數海里に敵影を發見せり。ここに於いて、戰鬪開始の令を下し、わが全艦隊に對し、

『皇國の興廢、この一戰に在り。各員、一層奮勵努力せよ。』との信號旗を掲げたり。而して主戰艦隊は斜に敵の先頭を壓迫し、装甲巡洋艦これにつゞき、他の諸戰隊はいづれも南下して敵の後尾を衝けり。これわが豫定策戰なり。

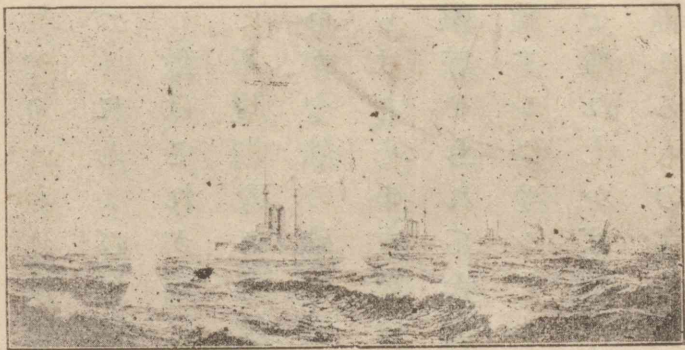
耐へて

オスラビヤ  
後三時十分  
没す、乗員八  
約四百名救助  
せらる。サ  
アルセキ  
ル三時十分  
八時五十分  
島北の方へ  
に、北の方へ  
す、八時十分  
の、八時十分  
が、八時十分  
の、八時十分  
の、八時十分

敵はわが壓迫を避けて、稍、右舷に舵を轉じ、こゝに砲火を開始せり。我れは暫くこれに耐へて、距離六千メートルに近づくにおよび、猛烈に敵の左右の先頭艦に砲火を集中せり。敵は、これが爲に益、東南に壓迫せらるゝものゝ如く、自然に不規則なる單縱陣となり、われと並航の姿勢をとりしが、わが全隊の砲火は、距離の短縮とゝもに、益著しき效果をあらはし、その左翼の先頭艦オスラビヤの如きは、須臾にして撃破せられて、大火災を起し、旗艦クニヤージスワロフ二番艦アレクサンドル三世も、また大火災に罹り、相ついで戦列を離れしかば、敵の陣形いよゝゝ亂れ、他の諸艦また火災に罹れるもの多く、炎煙西風に襲きて、忽ち海面を蔽ひ、濛氣と共に全く敵影を包みぬ。これ午後二時四十五分にして、



千早  
通報艦なり。  
廣瀬  
中佐、名は順太郎。  
鈴木  
中佐、名は貫太郎。



彼我の勝敗は既にこの間に決せしなり。  
我れは煙霧のうちに、敵影を發見する毎に、緩にこれを砲撃しつつ敵の前路に出でしかば、敵は俄に變針して、北方に遁走を試みんとせり。我れは急にその前路を扼して、再び南方に壓迫し猛射せしかば、敵の諸艦は、多大なる損害を受けて、頗る混亂を極めぬ。この間に、壯烈なる事蹟として特記すべきは、千早および廣瀬、鈴木の

スワロフ午後七時二十分沈没す。

彷徨  
わづらふさま。

鬱陵島  
朝鮮竹邊灣内にあり。

兩驅逐隊が、敵の敗艦スワロフに對し、二回まで勇敢なる水雷攻撃を執行せしことなり。  
かくて我れは、洋上に彷徨離散せる殘敵を、縦横に搜索して、これが撃沈につとめぬ。この時夕陽すでに春き、わが驅逐隊水雷艇隊は、漸次に敵に逼れるを以て、主戰艦隊は日没と共にひきあげ、同時に本職は、全軍北航して、明朝鬱陵島に集合すべし。と傳令せしめ、こゝに當日の晝戰を結了せり。

### 七 日本海の大戦 その二

この日朝來南西の強風、浪を揚ぐること高く、夕刻に至りて、風や、和きたれども、浪なほ靜らず。洋中の水雷攻撃は不利尠からざりしが、各驅逐隊および艇隊は、この千歳一遇



争うて  
蝟集  
はりれすみの  
毛の如くすみの  
つまり来るこ  
さ。

の時機を失せんを恐れ、皆風濤を冒して、日没前に來り會し、各、先を争うて敵の周圍に蝟集し、午後十一時頃に至るまで、連續肉薄して、激烈なる攻撃を加へつ。敵は探照砲火を以て、極力防戦せしが、遂にこの攻撃に耐へず、僚艦相失して四分五裂の状態となり、各、一方の血路を覓めんとせしかば、わが追撃のために、一場の大混戦を現出し、少くも敵艦三隻はこの間にわが水雷に罹りて、全くその戦闘航行力を失ひぬ。後日捕虜の言を聞くに、當夜水雷攻撃の猛烈なりしは、殆ど言語に絶し、左右應接の遑なく、かつその距離あまりに近き爲に、備砲俯角の度を過ぎて、照準する能はざりきといふ。

二十八日黎明、濛氣拭へるが如し。既に鬱陵島附近にありしわが艦隊は、はやくも東方にあたり、艦隊の煤煙數條あるを發見せり。これ問はずして、殘敵の主力たるや明なり。即ち三方よりこれを包圍す。もとより敗餘の敵艦、已に多大なる損傷を負へるのみならず、わが優勢に抵抗し得べきにあらざれば、砲火の開かるゝや、須臾にして白旗を掲げ、敵艦司令官ネボカトフ少將は、その戦艦四隻を舉げて部下と共に降意を表しぬ。本職は特に將校以上に帶劍を許して、これを受けたり。

官に敵司令長  
官の移乗せし  
機損傷せし  
上石炭乏  
せり爲、更に  
乗せしめたり。

驅逐艦連陽炎は、鬱陵島附近において、敵の驅逐艦二隻の遁走し來れるを發見し、極力これを追及して、戦闘を開始せしに、その後續艦は遂に白旗を掲げぬ。

これピエードウイにして、敵艦隊司令長官ロゼストウエンスキー中將、およびその幕僚の移乗し居るを知り、その乗







吾人をして遠慮なく語らしめよ。吾人が我が農村の青年諸君に、期待するもの極めて大なり。蓋し農村を活かすも殺すも、一に青年の心得如何にあり。豈に啻に農村のみと謂はんや。天下盛衰興亡の機、一に諸君の手中にあればなり。苟も國民の剛健、忠勇なる要素を求めんと欲せんか、世界列國何の處にか、農村を除外して、他に之を求めんや。而して其の農村の活力の源泉は、實に青年諸君にあり、諸君の任亦重からずや。

青年の青年たる特色は、他の指導、鼓舞を待たず、自ら奮發、興起するにあり。而して吾人が今茲に彼等に望む所は、第一國家心を養成するにあり。詳に解釋すれば、大日本帝國を以て、彼等の理想とするにあり。凡そ青年に不幸なるは、

虛無主義  
 現世の國家宗  
 教學問其他す  
 へての組織に  
 服従せんとす  
 る主義。



蘇峯肖像

理想なきより甚だしきはなし。理想なければ、志望なく、志望なければ、克己なく、努力なく、而して是等なければ、自暴、自棄に陥らざるもの、殆ど稀なり。單に理想を獎勵すれば、青年は往々空想に耽くるの危険なしとせず、社會主義も理想にあらずや。虛無主義も理想にあらずや。若し強ひて云は、利那主義も亦た、無理想を以て、理想とするものにあらずや。然も吾人の所謂理想とは、國家的理想なり。國家を以て理想とするなり。即ち一身を以て、日本帝國に繋ぎ帝國の利害休戚を以て、一身の利害休戚と



爲すなり。即ち個人を擴大して、國家的に膨脹するなり。更に吾人が農村の青年諸君に望む所は(第二)世界的知識の養成にあり。世界的知識とは、聊か仰山なる申分なれども、其實は我が周圍に對する知識なり。即ち我が日本帝國と、列強との國際關係なり、勢力關係なり、經濟關係なり、吾人若し單に國家心のみを養成し、世界的知識に及ばざらんか。折角養成し得たる國家心は、却つて吾人をして國家を誤らしむるに到らむも、未だ知る可からず。何となれば是れ己を知りて他を知らざればなり。自惚<sup>おぼ</sup>増長は、國家の大患なり。所謂、油斷大敵とは斯る状態を指すものにあらずや。然も吾人が更に農村の青年に望むは、(第三)自治的實行にあり。吾人が特に農村の青年に望むは、其の農村の協同生

活を、改善、向上せしむるにあり。若し彼等が隣人の爲めに努力するを以て、天下の爲めに努力する所以たることを知らば、彼等は其の努力に於て、一層油が乗り來る可きなり。而して一村の協同生活を、圓滿ならしむるは、一國の協同生活を圓滿ならしむる所以たるを知らば、彼等は其の極めて小なる働の中に、極めて大なる意義を發見せずんばあらざるなり。蓋し今日の憂は、理想ある者は、實地を知らず。實地を履む者は、理想を忘れ、手ある者は、眼なく、眼ある者は、手なきにあり。されば吾人が如上の三要件、即ち(第一)國家を理想とする事、(第二)世界的知識を求むる事、(第三)自治的實行を勵<sup>も</sup>むる事等を以て、我が農村の青年諸君に望むもの、良<sup>よ</sup>に所以ありとせざる可らず。此の如く我が農村の青年諸君



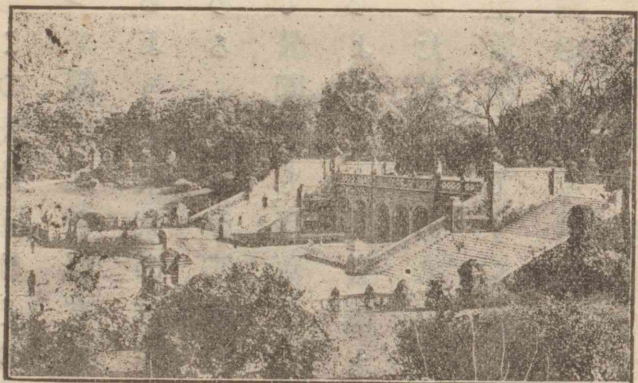




シベリヤ  
北部亞細亞  
帶の地

曲つて、公園の西通へ出た。しかたがないから、博物館の見當にあたる八十丁目あたりで私は下りた。なかに公園の事だから、この邊を眞直に通りぬけて東の方へ三四町も歩けば博物館に到着疑なしと獨合點したのがそもくゝの誤。大雪の降りしきる中に、人通りはおろか犬ころ一匹ゐないところを、痛い足を引きずつて、行けどもくゝ博物館らしいものは見當らぬ。やがて小山のやうな處へ上つて見るとそこには馬鹿くしく大きな池がある。何でもニユーヨーク全市に水を供給する貯水池はこれであるらしい。寒さと疲労とで弱りはてた私は、今更あとへ引きかへす事もならず、さりとて肝腎の博物館はどこにあるのやら影も形も見えない。尋ねようにも人はない。まるでシベリヤの

大きな荒野の眞中で行暮れたやうな心細さであつた。痛



私が如何なる場合にても、地圖や數字に不注意である天罰

九 中央公園

む足をじつと撫つて漫々たる池の水を獨り茫然として眺めた時ばかりは、此のとつともない大きな公園に對して心から私は兜を脱いだ。仕方がないからまた十町あまりも足を引きずつて、やつこのこと博物館へ辿り着いた時は、もう氣息奄々として病める野良犬の如く、とても陳列館など見る勇氣も何もなかつた。これは



だと云つて友人が笑つた。

この大公園はその名の示す如く、市の中央目抜の地にあつて假に之を私有地だとすれば、確に土一升金一升の地面ちようど東京の日本橋あたりか大阪の船場の様な位置にある。それを惜氣もなく南北二哩半、東西約一哩をしきつて公園とし、巨萬の財を之れに投じて園藝術の極致を盡し、ちようど、上野公園と日比谷公園とを合せたやうな設備をしたものである。その餘りに廣大なために、ニューヨーク土着の人ですら、屢、この中で道に迷ふといふのは有名な話である。ニューヨークの市中には、ハドソン河畔リバーサイドか、さもなくば餘程場末でもなければ、市人が獨占の庭園と目すべきものは決してない。そこで大小無數の

日本橋  
東京市の中心  
商業の繁盛な  
るところ。

船場  
大阪市中の繁  
盛の地區。

上野公園  
東京市下谷區  
自然の風致に  
すぐれてゐる。

日比谷公園  
東京市麹町區  
人工庭設備及  
び造のにすぐ  
れてゐる。

ハドソン河  
北部の山中に  
發し、ニューヨ  
ーク灣に注  
ぐ。

オアシス  
沙漠の中にわ  
つて綠樹清泉  
のある地區。

ハイドパー  
ク  
ケンシントン  
にロンドン共  
名高い公園。

公園はロンドン人が所謂市の肺臓ともなり、黃塵萬丈の地にオアシスともなつて五百萬の市民に貴賤貧富の別なき共同の恩惠を與へるのである。私は土一升金一升の眞中に、こんなだゞつ廣い大きい公園があらうとは夢にも知らぬので、驚かされるのみか、閉口し降参させられたのであつた。

ロンドンに遊んだ人は、誰でもハイドパークの大きいのに呆れる。其の面積は三百六十一エーカーで、これに隣したケンシントンガーデンを合せると六百三十一エーカー、即ち七十七萬八千五百坪、東京の日比谷公園の十八倍もある。しかしニューヨークの中央公園は八百七十九エーカーの地を占めて、ロンドンの此の二大公園を合せたよりも



更に遙に大きいのである。たしかに日本人の度膽を抜くに足るものである。(印象記)

一〇 川 柳

本ぶりになつて出て行く雨やどり。  
御扇子をちと拜見と讀めぬなり。  
きげんよく貸す鋸は息がきれ。  
千客萬來、皆來ると困るなり。  
雞が欠伸をするも聾言ひ。  
轉寐の顔へ一冊屋根に茸き。  
立聞は今來たやうに内に入り。  
居候三杯目にはそつと出し。

添乳してつひ洗濯が夢になり。  
病み上り母を使ふが癖になり。  
寐忘れた下女はやたらに薪をくべ。  
よく見れば手の届くだけ濫い柿。  
手の甲へ餅を受取る煤拂ひ。

一一 災都より大阪へ(自修文) 福馬謙造

前古未曾有の天變が俄然東京市を襲つた。戦場の如き帝都には一日午後二時既に二十二箇所より火を發した。  
新橋方面から燃えて來た火は、今や我東京朝日にも近づいた。一方數寄屋橋方面からも紅蓮の舌が延びつゝある。  
この大地震にビクともしなかつたわが社も今正背兩面の焰にはとても助かりさうにない。  
〔重要書類は皆出した。この上は天運に委すより外はない〕

福馬謙造  
東京朝日新聞  
記者  
大正十二年九月一日

わが社  
東京朝日新聞



下村專務  
下村宏

最後まで屋上に止まつてゐた下村專務が全身黒煙に巻かれつゝ決死の覺悟で働いてゐた社員に引上げを命じた時には我社は已に火焰に包まれてゐた。

こゝに於て東京全市の殆ど絶滅せんとする大災厄を大阪本社に報すべく吾等は此の重大な使命を帯びてこゝに東海道突破の擧を企て予等三名（中川野田兩氏）とは自働車を驅つて大阪に向つた。避難民の絡繹として斷えぬ品川街道を大森までやつて來たが、村井銀行品川支店が街路に倒れてゐて通れないので止むなく引返して新宿街道に向つた。

此時既に街路の中央は避難民が壘又は筵を敷き、僅かに取出した家財道具の傍に恐怖に慄へつゝ、どこ迄も打續いてゐた。

一路自動車は是等の中を八王子に向つたが、道路の龜裂甚しく、宛ら塹壕の中を往く様だ。

橋といふ橋に完全なものはなく、警察署青年團等の助力により自動車を擔ぎあげてやつと府中に出た。

此地方の慘害は割に少かつたが、今夜十二時に揺り返しが來ると言ふの

で竹藪や道の真中に蚊帳を吊つて慄へてゐる。かうした有様はずつと平塚まで續いてゐて、帝都の空に赤々と燃え映える猛火は、これら避難民に一層の恐怖を加へたらしい。

八王子市につくや否や市民は、予等の自動車が東京から來たとの一聲に續々と雲集して來る是等の人々に、簡單なりにも消息を傳へる爲に屢、止まらねばならなかつた。

夜に入つた。ヘッドライトを以て龜裂した路を照しつゝ進んだが深い龜裂の爲には幾度か道筋の變更を餘儀なくさせられた。

座間を進む事約一哩幅五間の道路は山崩れの爲に一步も進めない。引返して僅かに七尺幅の木橋をメリメリと物凄い音を聞きつゝ突進したが、厚木町の入口なる相模川に架れる百二十二間の鐵筋コンクリート橋までが完全に落ちて一步も進めない。こゝで自動車を捨て、漸く河中を泳いで對岸に達し厚木町に這入つた。

厚木町は二千餘軒中僅かに十數軒が残つたばかりなのに、海嘯來の噂に全町人つ子一人居ない。猛火はメロメロと燃えるに委されて荒寥たる光



景である。

予は漸く一人の青年を探し出して平塚への道を聞いたが、その若い青木といふ十七歳の青年の一家族は六人共焼死したらしいので彼は丸で白痴の様に幾度か予等にそれを繰返した。十年前二十餘萬圓を以て厚木町が大なる誇りとして築いた混泥土コンクリートの防波堤も全く粉微塵に破壊されてゐた。青年は幾度か宅の者はなせ早く火から出ないんだらうと獨語の如く繰返しながら先に立つて案内して呉れた。町はづれで此の不幸な青年と別れて平塚に向つた。

よぢる

青白い月光に照し出された地上を三人は歩むと言ふより全く這ひよぢだ。厚木から約三哩離れても尙帝都の空は赤く見えて、猛火の峻烈さを語つて居た。

午前四時頃渴と空腹とに堪へ兼ねて、とある潰れた家に、一杯の水を乞うた。すると狂氣したらしい主婦は

「九歳の男の子が此の屋根の下にゐるんです貴下出して下さい」と哀泣して助けを求めた。

漸く薩摩芋と水とに力を得て平塚に向ふ途中、野田特派員は尙詳細に附近の慘狀を視察すべく予等と別れた。

午前零時予は漸く平塚に入つたが、慘狀はそこにも横はつて、家といふ家は殆んど倒壊してゐた。

平塚町では同町郊外の海軍火薬庫が一日正午爆發して三十餘名の死者を出したとて町民の涙と共に語られて居た。

この町も海嘯が來るといふ噂に、全町民は殆んど町にはゐなかつた。茅ヶ崎平塚間の馬入川鐵橋も亦墜落し二日正午から漸く通れる様になつた。平塚から大磯までの間は殆んど潰れない家はないといつてもいゝ状態だ。大磯に入ると自動車の影を見付けたので予等が太平自動車店に行くとその車庫には血に染んだ四十名ばかりの人々が物凄く呻うめ呻いてしてゐる、これは大磯二宮間の列車顛覆の犠牲だつた。

すぐ海に面して機關車から五輛目迄が横様に倒れ後部十二輛も海側に倒れて連結機が千切られてゐる。太平自動車店のすぐ裏には七名の死體が二重ねにしてある。この時四歳位の女兒が死體となつた母の首にとり

呻  
うめいて。



すがつて泣き喚いてゐるのにはそゞろ涙を催させられた。  
こゝで漸く再び自動車に乗つて約五六町もゆくと、もう松の大木が道を塞いでゐるので止むなく、自動車を見捨てた。

そこへ洋服に汗の滲んだ麥稈帽の伊達邦宗伯がやつて来て「私の別荘は滅茶々々だ。東京へも歸れんし、全く弱つてゐる」と泣言を列べてゐた。  
二宮では潰れた米店を町の青年團が掘り返し、婦人連が米の塵を選び分けてゐる。

東京横濱其他沿線の災害を聞きつけた箱根以西の人々や、旅行先で遭難した人等で東海道筋は徒歩の往來が可なり頻繁だが、湯を沸す水に乏しいので随分汚い井戸までが水汲む人で繁昌を極めてゐる。

土地の人々は何れも道の中央に立ちはだかつて、東から來る人々を見付かり次第に、

「お前さんどこから來た」

「東京から」と正直に言ひでもすると「おらが息子は本所にゐるがどうだらう？」俺の娘は？」と忽ち取り圍まれ問ひ倒されてしまふ。予等は止むなく

その撃退策として附近町民の如く言ひ抜ける事にした。

漸くにして國府津に辿りついた。時に二日午後六時、物資は益缺乏だ。

菓子でもと、或る一軒を覗いて見たが皆な山へ或は驛の構内へと避難して誰一人ゐない。中には代金を置いて品物を持つて行く者もある。夜は追つて來る咽喉は渴く、腹は空く、氣丈けは大阪に飛んで行くが力が伴はない。町の中を白い棺が幾つも通る。國府津町丈けの壓死者が四十餘名もあるといふ。同地一といふ「つたや旅館」からも女中の屍體が運ばれてゐたが、こんな光景は最早人々の目には平氣だ。

國府津驛は原形こそ保つて居るが、中は滅茶々々で驛長も列車の一部に避難してゐる有様だ。驛前には藁や疊の上に避難した人達がだん／＼と乏しくなる米を氣にして、頻りに食料の事ばかり言つてゐた。もし此の儘に三四日も放任すると彼等は只餓死するより外はない。

二十一輛の東京行列車が一列車止まつてゐるが、その中は全くの町民と家を失つた當てなき旅人とで充満して居る。そこでは全く共產制度で、一



人が握り飯を持つてくる、それが順々に平等に分たれる。水までが當番に依つて配給されてゐる。

別荘が潰れたからと言つて東京の株式店廣瀬大橋氏の令嬢弓子さんも兄さんの新夫人と共にこゝに避難して居たが、無論プロもなくブルも無い全くの平等制度の仲間入りをしてゐた。

予はこゝで中川特派員と別れて貨物列車の一隅にゴロリと横になつて豚の臭を嗅ぎつゝ一睡の夢を食つたが、夜中驛員の大聲にふと眼ざめるとプラットホームに積んであつた梨箱を夜に乗じて町民の幾人か打壊しに來たのを驛員が発見した騒ぎなのであつた。

食ふ物がなくなり萬策に窮した結果と判り、驛長はその罪を許して後を戒めたが、これらも一の悲惨な挿話だ。

予は三時間の眠りに勇氣百倍して三日午前三時懷中電燈を照しつゝ、線路傳ひに愈々箱根の峻険にとりかゝつた。

國府津驛を出て約三哩下曾我驛との間に六六八〇の上り貨物列車が一臺、餘の如く幾彎曲した線路から脱線して横様に倒れてゐる。五十餘輛の

貨物車の中から肥料や紙束等が投げ出されてゐた、内五輛丈けには豚籠が積んであり五十餘頭の豚がまだ鼻を鳴らしてゐた。

下曾我驛附近の鐵道は全く大波の如く波動形に地形を亂し、線路は丸で相交錯してゐる。この慘状はすつと山北迄續き、酒匂川第三トンネルは山崩れのため全く打ち潰れこゝを通過するには屏風の様な路なき山を上下せねばならなかつた。

駿河驛約二哩手前から沛然たる豪雨が襲つて來た。その中を小山富士紡績の慘跡を眺めつゝ骨の髓まで濡れそぼちたまゝ、命辛々御殿場に着時に三日午後四時、疲れ切つた身を自動車に託し午後八時半裾野驛から大阪行列車に投じ、四日午前八時五十分梅田着やつと報告の使命を完うすることを得た。(週間朝日)

## 一二 帝釋峽の眞價値

國府 犀 東

風景地を人生の必需となすは、泰西一般の原則たり。清

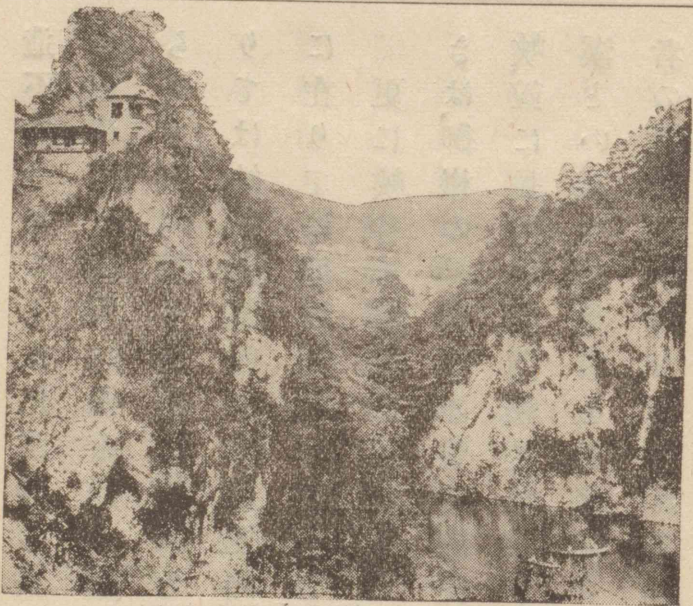
國府犀東  
名は種徳、漢  
詩人の内務省  
鳴託。



蓬萊  
神仙の棲むといふ島三神山(方丈瀛洲蓬萊)の一。

新なる空氣と、秀靈なる風味とは、人生の疲勞を一轉せしめ、人の健康を増加せしめ、活力を添へ、能率を進め、延壽長生を得しめ、更に人の情趣を暢達せしめ、品性を陶冶せしむるに至りては、眞に人工の遠く及ばざる所なり。  
若返り法は、風景地を措いて之を何れにか索むべき。不老不死の藥は、古より蓬萊の嶼しまに在りと言ひ傳へらる。是れ必らずしも虚構假託の言にはあらず。蓬萊の嶼とは風景絶佳、山水秀麗の地區を指していへるなり。日本の國土を擧げて、蓬萊の趣ありとせられしは、既に千年の昔に在り。今は其の遺容を僅かに幾多名勝の地域に於て彷彿すべきのみ。  
せめてはかゝる蓬萊の地域に入りて、十分に不老不死の

帝釋峽  
比婆郡に亘る峽谷二石三正十三年三月内務省よてり名勝地として指定さる。



帝釋峽 狗賓嶽 野水池畔

仙藥を覓めしむるやう、一人にても多くの同胞に資益多からしむるが人生重要な一使命たるべし。これは一般風景地を通じて認むべき價值の存する所なり。而して備後の帝釋峽たひきやまに至りては、その未だ處女時代を去ること遠からざるの狀況に在るだけ、それだけ他の名勝地に比して、更に一層の價值の存するを認

識せざるを得ず。



風景の研究者中には、要素の本位を地形に置き、岩石の構造不均一なると、風化浸蝕の實狀多様なると、節理の發達せると、石柱及び天然橋を成し、形狀によりて種々の名を附せらるゝとの點より、之が代表とも見るべきものを關東に在りては妙義山、畿内中國及四國方面に在りては神懸山、九州に在りては耶馬溪なりとす。

更に峽谷の勝景に富むものを求めて、同一の標式とすべきは、御嶽の昇仙峽、木曾の寢覺が床、備中の豪溪、備後の帝釋峽、並に長門の長門峽是れなりといふ。前者を日本の三名溪といふべく、後者を、五名峽と稱すべしとは、最近風景研究者の共に許す所なり。此の如き見地より、帝釋峽を評價するは、是れも一見識たるには相違なけれども、固より全價値を明示するには足らざるべし。

史蹟名勝天然紀念物保存法の制定せられし立法の精神は、此の如き狹隘なる見地に立脚するものにはあらず、寧ろ更に一般の高處大處より著眼し來りて、國體の精華を發揮し、國民性を陶冶し、並に學術の研鑽けんざんに資益すといふもの、即ち立法の精神に外ならず。風景地をして、單に學究の研覈けんかく資料たらしむるは餘りに風景地の評價を狹からしむるものなり。これにては全價値の幾分を計算し得るに過ぎざるべく、如何にも物足らざる感なきにあらず、されば帝釋峽に對しても觀察の標準を立法の精神とする所に取らむことを切望す。

帝釋峽に對する説明としては寧ろ今後に於ける仔細な

研覈  
みがかきあきら  
まかにするこ



雄橋 長さ二十三丈  
四尺幅より二  
尺橋腹より水  
面まで五丈二  
尺

雌橋 橋幅二十三丈  
長さ六丈三尺  
橋腹より水面  
まで約四丈

る觀察を重ねたる後の事とするを至當とせむ。されど史蹟名勝天然記念物調査會に於て説明せられし所によれば、「石灰岩より成れる天然橋の架れる峽谷にして、雄橋及び雌橋の二橋あり、雄橋は又神橋とも稱し、高さ約四十尺、徑間百五十尺、雌橋は、雄橋の下流、約半里に在りて高さ約十六尺、徑間約六十尺なりとす。兩天然橋の間及び其上下流に沿ひては、兩岸數百尺の絶壁を成し、又洞穴及洞門を見るを得へく、河流は急湍を成し、兩岸の峭壁と、森林の美と相俟ちて、風景の地區を成す。蓋し石灰岩地に於ける峽谷の一標式たるもの、其の天然橋は規模大にして、他に多く其の比を見ず」といふ。

これは説明なれば致し方なし。これだけを読み、帝釋

恍惚  
みされてうっ  
こりする。

峽の美を味ふことを得べきか。法律文を讀下して、これも美文なりといふ人あらば、この説明にて、直ちに恍惚神往き、一切を忘するの佳境に入らむ。されど帝釋峽には、かゝる説明にて言ひ現はし得ざるの眞價值あるを知らざるべからず。

優美秀麗、清淑明媚の景物、これを感じるは、説明にあらず。觀賞の要諦は、物の眞美を直覺するに在り。國民性の陶冶に至大の關係あるの點に想ひ到らば、帝釋峽の一帶、今尙ほ素蓋鳴尊、鏡川上に妻籠りせられしころの、原始に近き光景を存するは、如何に國の寶とすべきやを、何人も直ちに領得すべし。

天然物の巧妙なる傑作は、帝釋峽の如く、岩石、林木、溪流、洞



帝釋天  
佛語喜見城  
及三十二天王  
を擁護し阿修  
羅を征す  
阿修羅王  
佛語力強く  
闘した魔神

竹越與三郎  
號は三又、越  
後の人、政治家  
家、史論家、  
皇室御修、  
貴族院議員、

穴、天然橋、石柱等種々なる景物の配合に於て、最も貴しとなす。帝釋天は阿修羅王と決戦して最後の勝利を得たるの神なり。峽谷に於ける奇岩怪石は阿修羅王八萬四千の眷屬、敗殘の餘に降伏して化石したるものにはあらざるか。かゝる聯想を起さしむるは、風景の奥行とも見らるべし。人もし帝釋峽の眞價値を知らむと欲せば、此の奥行の深さをも、要素の一として考ふるを要す。奥行の深きは、風景の意義をして愈深からしむ。同好の士、幸に此の眞味を知るあらむことを。

### 一三 地方自治

竹越與三郎

富士の高きも、その基は人の注意せざる麓の細砂小土に

あり。國家の組織如何に大なりとも、その基は市町村にあり。我等の住居する市町村の政治は、即ち國家の發動する淵源なり。されば市町村を愛せずして、その國を愛し、その市町村に力を致さずして、その國に力を致すと云ふ者ありとも、余は未だ信ずること能はず。

地方に府會あり、縣會あり、人民の選舉したる議員及び參事會員ありて、地方政治に參與す。かくて府縣は人民自ら其の府縣を治むる形跡あるが故に、自治體といふことを得べし。然れども府縣には知事あり、知事は中央政府の行政權を代表したる官吏にて、この官吏が府縣を治むるものなれば、未だ純然たる自治とはいふべからざるものあり。人民自ら政治を行ふ眞の自治體は、ひとり市町村あるのみ。



營造物  
道路・橋梁・港  
灣・公園・學校  
病院・圖書館・  
鐵道・郵便等。

公民

- (一) 帝國國民たる男子で、年齢満十五年以上の者たること
- (二) 獨立の生計を營む者たること
- (三) 二年以來其のたる者なること
- (四) 市町村の直接に納むる者たること

凡そ市にせよ、町にせよ、村にせよ、日本人民にて其の區域に住居する者は即ち市町村の住民にして、公共の費用にて建設したる營造物及び共有財産を共用する權利あり。如何なる人なりとも、市町村の住民たる以上は、其の市立町村立の小學校に、其の兒童を入るゝ權あるが如きは是なり。二十五歳以上の住民にて、獨立の生計を營める男子が、その市町村に住居すること二年以上にて、幾何なりとも直接市町村税を納むるものは公民といはる。公民たるものは市町村會の議員を選擧し、議員に選擧せらるゝ權利あり。また市にては參事會員の如き、名譽職に選擧せらるゝ權利ある者は、之を辭すること能はずと定めたり。これ市町村は自治體にて、自治體を經營するは、市町村民の義務なるが故なり。

かくて、公民の選擧したる議員相集まりて、市會町會若しくは村會を組織す。右の會議にて、市・町・村長を選擧す。市會にては、此の外また市參事會員を選擧す。

市町村會の權限は幾何なるかといふに、市町村の費用にて支辨する事業を行ふべきや否やを議し、歳入と歳出との豫算を定め、而して已むを得ざる事情によりて、經費が豫算に超過したる時之を認定し、法律勅令にて定むるものゝ外、使用料・手数料・町村税・夫役及び現品の賦課、徵收法を定め、共有不動産の賣買・交換等をなし、市町村にかゝる訴訟・和解の事など、市町村の政治は一切之によらざるものなし。

自治機關の權力は、以上の如く大なるものなるが故に、萬



隣保團結  
 住む者互に  
 助け合つて  
 自然に國を  
 治め美風を  
 興すこと  
 古來の自治  
 の基は此の  
 美風を興す  
 ことなり  
 是れ今日の  
 自治の基に  
 あり

一その權力を害用するものあらんには、住民の禍害はいふべからざるものあらん。たとへば、昔は市町村に勢力ある人民が、或一人を故なく嫌悪するときは、多數人民もこれに雷同して、公私大小の事、其の人を妨害し、遂に其の人を市町村以外に退去せしめずんば止まざらんとしたること少からざりき。國法によりて權利を定められたる市町村會がかゝる排他の精神にて政治を行はんに、は自治制の根本たる隣保團結の一事は、全く行はれざるに至らん。且又最も注意すべきは、地方の事業を擴張すと稱して、漫に事業をおこし、其の間に濫費を生じ、地方人民の負擔を重くする一事なり。此の弊は市町村會のみならず、府縣會にても其の甚だしきを見る。

寛容交讓  
 心をひろく  
 つつて他人を  
 容れし、互に  
 譲りあふ

例へば、府縣會議員の選出せられたる町村に、便利なる道路を作らんがために、その急務なると否とを問はずして、事業を始め、府縣會議員の選出せられざる町村に對しては、正當の理由あるにも拘らず、一切便利なる事業を開始せざるが如きことは、往々見聞する事にて、かくの如きは善良にして公共心に富む良民のなすべき事にはあらず。我等は、自治制の根本は隣保の共同團結にあり。共同團結の基は寛容交讓にあることを、一日も忘る可からざるなり。

歐米にては、一代に盛名ある政治家・將軍・學者等が、老年に至りて郷里に歸休するや、或は市町村長たり、或は府縣會・市町村會の議員となりて力を地方政治に用ふるもの少からず。かゝる人知れぬ所に力を用ふる者ありてこそ、國家の



基礎は牢固として定まるなれ。されば力を一身一家の外に及さんとする者は、先づ手近くして、最も人民の禍福に係ある、自治體の政治に力を用ひざるべからず。

一四 晝の農夫

島崎藤村

誰か知るべき秋の葉の、  
落ちて樹の根を埋むとき、  
重く聲無き石の下  
清水溢れて流るとは、  
誰か知るべき小山田の、  
稻穂のたわに實のるとき、  
花なく香なき賤の胸、

島崎藤村  
詩人且小説家  
名は春樹  
治五年信濃國  
に生る。

生命<sup>いのち</sup> 躑りて響くとは。

共に來て蒔き、來て植ゑし  
田の面に秋の風落ちて、  
野邊の琥珀<sup>はくはく</sup>を鳴すかな、  
刈乾せ、刈乾せ、稻の穂を。

血潮は草に流さねど、  
力うちふり鋤をうち、  
天の風雨<sup>かぜあめ</sup>に雷霆に、  
わが闘<sup>たかひ</sup>の跡やこゝ。  
見よ日は高き青空の  
端より端を弓として



今し父の矢、母の矢の、  
光を降らす眞晝中。

共に來て蒔き、來て植ゑし

田の面に秋の風落ちて

野邊の琥珀を鳴すかな、

刈乾せ、刈乾せ、稻の穂を、

左手に稻を捉む時、

右手に利鎌を握る時、

胸滿ちくれば火のごとく、

骨と髓との燃ゆる時、

土と塵埃と泥の上に、

汗と膩あぶらの落つる時、

緑にまじる黄の莖に、

烈しき息のかゝる時、

共に來て蒔き、來て植ゑし

田の面に秋の風落ちて、

野邊の琥珀を鳴すかな、

刈乾せ、刈乾せ、稻の穂を。

一五 南洲遺訓

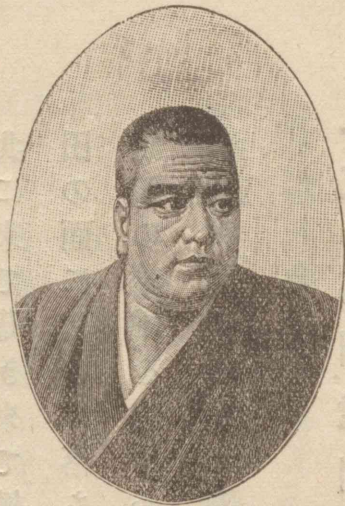
西郷隆盛

事、大小となく、正道を履み至誠を推し、一事の詐謀を用ふ  
べからず。人多くは事の差支ふる時に臨み、策略を用ひて  
一旦その差支を通せば、後は、事宜次第工夫の出來る様に思

詐謀  
かりこせ。の  
はいつはりの  
は



へども、策略の煩ひ屹度生じ、事必ず敗るゝものぞ。正道を以て之を行へば、目前には迂遠なる様なれども、先に行けば成功早きものなり。身を修むるに克己を以て終始せよ、總じて、人は己に克つを以て成



西り、自ら愛するを以て敗るゝものぞ。よく古今の人物を隆見よ。事業を創起する人、大抵、十に七八までは能く成し得れども、残り二つの終まで

成し得る人は、稀なり。始は、よく己を慎み事をも敬する故、功も立ち名も顯るゝなり。功立ち名顯るゝに隨ひ、いつしか自ら愛する心起り、恐懼戒慎の意弛み、驕矜りうきんの氣漸く長じ、

驕矜りうきんたること

君子戒慎乎其所、不懼乎其所、不聞（中庸）

道義貫心肝、忠誠填骨髓、死生之問、笑於南洲、右應松方君需

その成し得たる事業を負み、終に敗るゝものにて、皆自ら招くなり。故に、己に克ちて、睹みず聞かざる所に戒慎すべきものなり。人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を

道義貫心肝、忠誠填骨髓、死生之問、笑於南洲、右應松方君需

盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ねべし。過を改

むるに、自ら過てり、とだに思ひつかば、それにて善し。その事をば棄て、顧みず、直ちに一步踏み出すべし。過を悔しく思ひ、取り繕はんとて、心配するは、譬へば茶碗をわり、その缺を集めて合せ見るが如く、詮もなきことなり。



曾我十郎時致  
同五郎時致

命もいらす、名もいらす、官位もいらぬ人は、始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大事は成し得られぬなり。道を行ふ者は、天下舉つて毀るも足らずとせず、天下舉つて譽むるも足れりとせず、自ら信ずること厚きが故なり。天下後世までも信仰悦服せらるゝものは、唯、これ、一箇の誠なり。古より父の仇を討ちし人、その數擧げて數へ難きが中に、獨り曾我兄弟のみ、今に至りて兒童婦女子までも知らざる者のあらざるは、衆に秀でて誠の篤きが故なり。誠ならずして譽めらるゝは、僥倖の譽なり。誠篤ければ、たとひ、當時知る人なくとも、後世必ず知己あるものなり。今の人才識あれば、事業は心次第に成さるゝものと思へ

ども才に任せて爲す事は、危くして見て居られぬものぞ。體ありてこそ用は行はるゝなれ。

一六 短歌

信綱 前出。

佐々木信綱

かしこきや神の御する日の皇子は

神ながら今日の吉事あげます。

天と長く地と久しく相むつび

相榮えまさむ御契たふと。

(以上二首皇太子殿下御成婚奉祝歌)

與謝野晶子

晶子 前出。

清水へ祇園をよぎる櫻月夜、



左千夫  
大正二年歿年  
五十

こよひあふ人みな美しき。  
ほとゝぎす嵯峨へは一里、京へ二里、

水の清瀧夜のあけやすき。

伊藤左千夫

七人の子の親なれば何事も

手まはりかねつ、うとしと思ふな。

(二月五日年賀狀に添へて)

橋の人と馬洗ふ人と、樂しげに

豊のみのりを相語るらし。

齋藤茂吉

茂吉  
醫家。明治十  
五年生。

あづきゆみ、春は寒けど、日あたりの

よろしきところつくくし萌ゆ。

空見ればあまた星居り、しかれども

いよいよ遠く光りつゝ見ゆ。

北原白秋

白秋  
名は隆吉。明  
治十八年生。

枇杷の實をかく落せば吾弟らが

麥藁帽にうけてけるかな。

月今宵背戸の畑の秋蕎麥に、

夜露ふりこぼれ晝のごと明し。

若山牧水

牧水  
名は繁。宮崎  
縣人。明治十八  
年生。

あたゝかう夜半降る雨をなつかしみ、

聞き入りをれば雷の鳴る。

雲二つあはんとしては又遠く

離れて消えぬ春の青空。



八月  
西曆千八百十  
五年

### 一七 ナポレオンの最後

(一) いざさらば母國よ

それは八月半の頃であつた。藍色の浪が軽く柔かに膨れ上つては、又平かに伸してゆく静かな夏の海を、英國の軍艦ノルサムバーランド號は、悉く張つた帆に豊かな風を孕ませながら駛るのであつた。掃き清められた艦の甲板には、帆綱の影が黒く映つてゐるばかりで、一人の水兵も出てゐなかつた。

大きな帆柱の陰から、こつこつと靴の音がして、一人の人が出て來た。少し離れて四人の人が俯きがちに歩いて來た。何れも黙つて甲板に立止つた。一番前に居る人は、や

ラ、ホーグ  
岬、  
英吉利海峡に  
突出せる岬。

魅せられる  
強かされる。  
強くひきつけ  
られる。



がて靜かに右の手で帽子をとつた。左の手はそつと後へ廻して腰の上に當てた。青い山の影がはつきりと見えた。佛國のラ、ホーグ岬である。帽子を脱いだ人の顔は蒼白かつた。廣い額の中程に、  
ナ 半月形の髮の毛が垂下  
ホ がつて居た。綠色の上着  
レ は胸の中央から左右に  
ナ 分れて、二列に並んだ胸  
ン ぼたんは運命の星の様に輝いてゐた。奥深く  
腰に廻してゐた手を劍の柵へ掛けて、後の四人は一樣に恭



塑像  
士の肖像。

ウオーター

ロー

白耳義の村

落、プラツセ

ルの南一里

は、年六月十

八日ナポレオ

ン英將リエリ

ントシ戦う

て敗る。

ナポレオン

コルシカ島に

生る。佛國の

大統領となり

皇帝となる。

(1769—1821)

弟

ルイ、ボナ

ナ

セントヘレ

南大西洋中の

孤島、亞非利

加の西岸を距

る一四五〇哩

面積四七方哩

しく頭を下げた。甲板の上へはらくくと涙が落ちた。振返つた人は言葉なく又前方を見入つた。大きな白い翼を張つた海鳥が二三羽、さわくと音を立て、舷を掠めて飛んだ。此の塑像の如く突立つてゐる人こそは、纔か二個月前に十數萬の大軍を率ゐてウオーターローの野に大激戦を演じた皇帝ナポレオンその人である。

最後の激戦に打負けて、一旦は巴里の都へ還つたけれども、落日は到底招き返されない。「今一度もり返しては」と膝に絶つて勧めた弟の願も退けて、遂に身を囚人の如く英艦に任せ、今しも大西洋中の一孤島セント、ヘレナへ流されて行くのである。歐洲の天地を震動させた英雄も、數十萬の精兵を己が手足の如く指揮した皇帝も、敵國に囚はれては、

憫むべき一個の囚人たるに過ぎなかつた。斯うして敵艦の甲板に立つて、次第に消え行く佛蘭西の岸をひたとばかりに眺め入る時も、あゝ、其の身邊を守つて居る家臣としては、唯この四人ばかりである。

潮の香を含んだ夏の風は翼を張つた様な帆を又帆綱をはたくくと鳴らした。四邊は何時の間にか陰つて來た。

離れ行く佛蘭西の岸は、山は、青い影は、やがて浪の上に曳く一筋の絲となつて、遠く幽かに消えようとした。五人は瞬もせず眺め入つた。

海の上は蒼く陰つて行つた。廣い海と廣い空は、其の間に一筋の絲となつて、消残つた佛蘭西の最後の影を、永久にナポレオンの眼から奪ひ去つた。



「愛する母國よ、いざさらば。」

主従五人は默然として甲板かたばんを降つた。

(二) 夢の五十三年

十月十四日、ノルサムバーランド號はセント、ヘレナの岸近く錨を下した。ナポレオンは例の如く、四人の従者を伴つて上甲板に昇つた。殆ど巖ばかりかと思はれるやうな島には、物淋しい秋風が吹いてゐた。空高く聳へ立つた山と山との間の狭い谷川に沿うて、穢い家がばら／＼と建ち竝んで居る。山の上には所々砲臺があつて、大砲は丸で刺の様に逆立つてゐた。

ナポレオンは雙眼鏡で四邊の様子を眺めた。六年の後には彼の墓場となるべき孤島を、今日の前に見た彼の胸の中は、嗚呼、果して何うであつたらうか。然るに彼の顔は晴しかつた。其の翌日彼等は遂に上陸した。此の日から殆ど六年間、彼は嚴重な冷やかな無禮な英國人の監督の下に四人の従者を相手として、淋しい餘生を送らねばならなかつた。海風の吹荒れる灰色の霧に包まれたじめ／＼とした離れ島の濕つた土は、次第々々に彼の健康を損ねさせた。光も花もない牢屋のやうな生活の後には、只「死」が其の冷い手で首を捲きに来るばかりであつた。

千八百二十一年四月の初頃から、彼の病氣は漸く悪くなつて來た。どう云ふものか、彼はひどく藥を嫌つて成るべく飲まない様にした。或日「東の空に彗星が見える。」と、人々が聲高に叫んだのを耳にした彼は、傍に居た醫師に向つて、



シーザー  
羅馬の大將軍  
政治家(前二  
一前年)  
彗星  
はうきほし。

昔英雄シーザーが死んだ時、その前兆に彗星が現れたと聞  
いて居る。恐らく此の彗星も俺の最期の前兆であらう。」と  
云つた。其の顔は蒼く沈んで居た。

病氣は益悪くなるばかりであつた。到底助からぬと思  
つた彼は、それ〴〵遺言状を作つて、心靜かに最後の日の來  
るのを待つた。五月に入ると、様子が俄に悪くなつた。傍  
に附添うて看護して居た人達は、何れも絶望の眼をちつと  
皇帝の顔に濺いだ。その月の四日、日が暮れてから間もな  
く雨が降りだし、風も吹きだした。夜が更けるにつれて、雨  
も風も益烈しくなつた。庭の立木は暴風雨の中に悲鳴を  
あげて戦き、身を揺ぶつて悶え苦しんだ。ナポレオンが何  
時も其の木蔭で休んだ楊の樹がやがて吹倒された。續い

て一本二本と到頭悉く地上に吹倒された。恐ろしい一夜  
は明けて、翌五日、頭……軍隊……と咬いた彼は、午後六時十一  
分、色褪せた唇の上に、微かに泡を湛へた儘、最後の息を引取  
つた。花の如く美しく、火の如く烈しく、そして落日の如く  
悲壯であつた英雄ナポレオンの五十三年の生涯は、斯くの  
如くにして終つたのである。(悲絶壯絶英雄の最後)

一八 ロイド、ジョージ(自修文) 河上肇

ロイド、ジョージは到頭總理大臣となつた。現代世界の政治家中、彼は私  
の最も好きな政治家である。蓋し彼は弱者の味方である。殊に不幸な弱  
者が無慈悲な强者の爲に、無道な壓制を受けて苦しむのを見る時は、彼は憤  
然として己が面に唾せられたが如くに嚇怒する。そして强者を抑へ弱者  
を扶ける爲に、彼は殆ど己が身命の危いのも顧みぬ人である。思ふに最も

河上肇  
山口縣の人、  
法學博士、京  
都帝國大學教  
授。  
ロイド、ジ  
ョージ  
(1864—)  
嚇怒  
はびく腹をた  
てる。



**南阿戰爭**  
英國ミトラン  
スブルの  
戰爭、1893年  
開戦、1902年  
トランスブル  
ル敗れて英領  
となる。

**トランスブル**  
南部亞弗利加  
に在る、面積  
一〇四二六  
方哩。

**ボリア人**  
南阿聯邦住民  
和蘭の植民

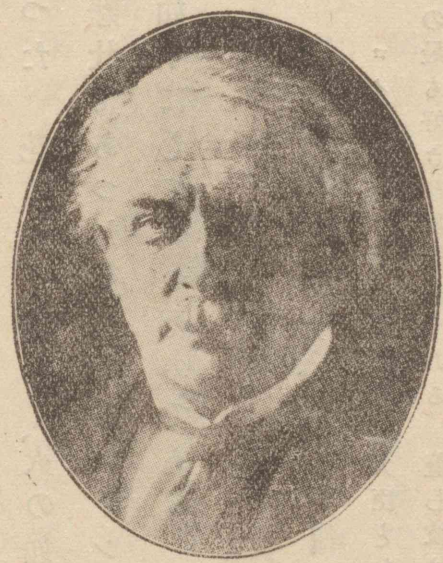
**無名の師**  
名義のたぬ  
軍。

**ウエールズ**  
不列顛島西  
南の山地、  
面積七三七八  
方哩。

**二小國**  
トランスブル  
ルミカレンヂ  
自由國。

**輕軒**  
たちがひ、へだ  
たり。

能く彼の人物を見るに足るのは、南阿戰爭當時の彼の態度である。  
苦學の結果、僅かに二十一歳で辯護士となり得た彼は、後選ばれて代議士  
となつたが、數年経たぬ中に彼一生の一大事件とも看做すべき南阿戰爭が



有するに過ぎぬ二小國に對し武力を以て其の要求を強制するのは、非道も  
甚しい事である。大英國にとつて最大の寶は、總べての弱き者虐げられて  
居る者の爲に其の希望たり楯たる特性即ち是である。是は此の大英國の

ジ・ヨ・ジ・ド・イ・カ

爆發した。南阿戰爭とは、英國が  
阿弗利加の南端トランスブル  
の金鑛を獲得する目的の下に、ボ  
リア人を相手に起した戰爭であ  
る。彼思へらく、こは資本家の貪  
慾を充す爲に起された無名の師  
である。世界最大の強國たる英  
國が、ウエールズ國中の最も小さ  
い二郡と、敢て軒輊のない人口を

**靈彩**  
かうん、しい  
色どり、たつ  
こい色彩。

**加奈陀**  
北米にある英  
國領地、南は  
大西洋、東は  
北太平洋、西  
北は北極洋。

**切諫**  
切にいさめる。  
熱心に意見す  
る。

**義を見て云**  
云、見、義  
子曰、無、勇  
也、爲、論語  
爲政篇。

**罵詈謗**  
がやく、さわ  
がしい。

**遊説**  
四方に説きま  
はることをい  
ふ。

榮光中、最も赫耀たる靈彩を放つ寶玉である。南阿邊境に如何に莫大の金  
銀を藏するからと云つて、大英國傳來の此の寶玉と交換するのは無道の極  
である。そこで一八九九年加奈陀に赴く途中で、開戦の報を耳にするや  
否や、彼は直ちに踵を回して倫敦に馳歸つて、即時に猛烈な非戰運動を始め  
た。國民全體が戰爭熱に浮かされて居る眞最中に、それ等熱狂した同胞を  
非難攻撃して、非戰運動を始め程世に無謀な仕事はない。彼の友人彼の  
同情者彼の後援者は、擧つて此の無謀な行動に反對し、彼が折角の人氣も一  
朝にして失墜するのを虞れて、「是非とも沈黙を守れ」と切諫した。而も義を  
見て爲さぬは勇が無いのである。そして彼ロイド、ジョージは勇者である。  
彼は乃ち囂々たる反對妨害罵詈謗を物ともせず、非戰論を提げて全國を  
遊説しようとして志し、先づ自己の選舉區に歸つた。すると有權者團體は、此の  
地で公開演説を開催する事の極めて不得策な旨を主張して已まなかつた  
が、彼は答へて言つた、「若しも諸君が強ひてしか主張せられるならば、余は議  
員の職を辭するの厭はない」と。斯くてウエールズに於ける第一回の演  
説は、反抗心に満ちた聽衆を前にして、カーマーゼンと云ふ町で催されたが、



カーマーゼン  
ウエルプの都市。人口約一萬。

破廉恥  
はち知らず。

假借  
ゆるす、大目に見る。

バンゴア  
ウエルプの都市。人口約一萬二千。

當時に於ける彼の精神は、次に記した彼の言葉の中に活躍して居る。「余が見て以て破廉恥となすもの、即ち南阿戦争に對し、余にして若し之に抗議するため、此の最初の機會は勿論、其の他總べての機會を捉へず已むならば、余は神及び人の前に立つて、自ら一個不忠な卑怯漢であるとの感を引き起さざるを得ないであらう。されば余は今夜も茲に敢て抗議する。縦令明日からは、此のカーマーゼンに一人の友人も居なくならうとも。」  
縦令總べての同胞を敵としても、不正不義に向つては、一步も假借すべきではないと云ふのが彼の精神であつた。併しながら彼が猛烈に運動すればする程、世間の反感も亦益々猛烈になるばかりであつた。現に彼自身の選挙區に於ても、バンゴアと云ふ所で演說會を開いた時などは、會館は猛烈な群集に依つて、絶間なく攻撃され、彼自身も市街の真中で袋叩に遭つた。斯様な風で、彼の不人望が其の絶頂に達した時、恰も一九〇〇年の總選挙が行はれた。此の時ばかりは、纔かに残つた彼の後援者も殆ど失望の極に陥つたが、流石は英國だ、彼は前回よりも遙かに多數の投票を得て重ねて選挙せられたのであつた。

縦横無盡  
自由自在に。

基督降誕祭  
十二月二十五日、クリスマス。

チャンパーレン  
1836年以來英國自由黨の首領(1838)。

バーミンガム  
倫敦の西北一、二哩、人口約五十五萬、英國第五位の都會。

擗猛  
むつよい。

殺氣  
ひ。殺す、いけは。

重ねて議員に選挙せられてから、彼は勇氣百倍して、縦横無盡に其の奮闘を續け、斯くて翌一九〇一年の十二月には彼は愈々基督降誕祭の前日を期して、南阿戦争の直接責任者たる植民大臣チャンパーレンの郷里バーミンガム市に攻入る豫定を立てた。抑、バーミンガム市は、チャンパーレンの本營で、氏の政敵が嘗て足一步も踏入れることの出来なかつたところである。チャンパーレンは早くから親しく同市の市政に参畫し、幾多の改良改革を斷行し、同市をして英國都市中の模範市たらしめた恩人で、數十萬の市民は、氏を神の如く崇拜して居たのである。されば、ロイド、ジョージが此の地に來るとの報が一度傳はると、同地の新聞紙は一齊に筆を揃へて、擗猛に彼の攻撃を開始し、「自稱國賊來らんとす」、「賣國奴ロイド、ジョージ侵入せんとす。」などと云ふ挑發的文字を以て、盛に市民の反感を煽動し、廣告隊は終日市中を練歩いた。「國王、政府及びチャンパーレン君を防衛する爲に、忠實なる總べての市民は、ロイド、ジョージの演說會場なる市會公堂に押寄せし」などと觸廻る勢で、彼のまだ來ない前から、殺氣は既に市内に漲つた。  
是に於てか警察部長は萬一を慮り、彼に向つて切に集會の中止を求めた



自ら反みて  
云々  
孟子、公孫丑  
篇に在る語  
縮からずん  
ば正しくなけれ  
ば  
褐寬博  
身分のいやし  
い者、唐袖を  
着てしまりの  
ない装した賤  
者の意。

けれども、元來彼ロイド、ジョージは、自ら反みて縮からずんば褐寬博と雖も吾  
慄れざらんや。自ら反みて縮くんば、千萬人と雖も吾往かん。と云ふ流儀の  
豪傑であるから、いかでこれしきの事にひるまう。愈豫定の日に豫定の場  
所で、大演説會を開く事になつた。そこで當日は警察官總出で市公會堂の  
界限を警戒し、建物の内部にも多勢潜伏して萬一に備へた。併し是等の準  
備も遂に總べて無効に歸した。ロイド、ジョージが其の雄姿を演壇に現は  
すや否や、場内の聴衆は密に携へて來た各種の飛道具を、演壇目掛けて一齊  
に放射し、場外の群衆も亦猛り狂うて、窓を破り扉を押し除けて亂入すると云  
ふ有様に、彼は遂に一語も發する事を得ず、演壇の後方に在る一小室に難を  
避け、警官の制服制帽を借りて遽に變裝し、纔に會場を抜出て、辛くも一命を  
拾うたのであつた。此の時人民の重傷を負つた者が二十七名、即死一名、重  
傷を蒙つた警官もまた少くなかつたと云へば、それで其の騷擾の如何に甚  
しかつたかを知り得ると同時に、平生冷靜沈着な英人が、斯程までの騷動を  
惹起した事は、其の激昂の度の如何に甚しかつたかをも知るに足ると思ふ。  
「ロイド、ジョージ傳」の著者エグソンは彼を評して、「ロイド、ジョージ以上の戰

隱然  
あらはて無い  
有様

闘的平和主張者は曾て見た事がない。彼は南阿戰爭當時に於いて、ポーア  
人が英軍に反抗して戰つたと同じ激しさを以て戰爭に反抗して戰つた。と  
云つて居るが、實に其の通りだと思ふ。

歐洲大戰の當時、彼は獨逸人の暴虐を懲罰する爲に、獅子奮迅の勢を以て、  
軍國の大事に當つた。開戦後間もなく軍需大臣となり、次いで陸軍大臣に  
轉じ、遂に總理大臣の椅子を占め、隱然として聯合諸國の總大將たる觀を呈  
した。而も余から之を見れば、彼は依然として、その昔英國パーミンガム市  
で、其の同胞の爲に殆ど一命を奪はれようとした當年の戰闘的平和主張者  
たるロイド、ジョージ其の儘の人であつたのである。

今や世界の諸國は、永遠の平和を確立することに努力してゐる。思ふに  
彼は、今後此の努力に對して、最も熱烈なる活動を試みる者の一人であらう。  
此の故に、私は全世界の平和のために、心から彼の健康を祝すると同時に、英  
國多數の貧民のため彼の生命の永へに長からん事を祈るのである。國家  
を異にし人種を異にしながら、私がひそかに其の長壽を祈りつゝあるのは、  
世界の政治家ロイド、ジョージ唯一人である。(河上肇貧乏物語)



近衛文麿

公爵、議和全權委員、隨員、生、明治二十四年

六月二十八日  
大正八年。

### 一九 平和は成れり

近衛 文 麿

萬然たる瑞氣  
おだやかない  
いだめてたい  
有様。

ヴェルサイユ宮  
佛國巴里の西  
南十一哩ヴェ  
ルサイユ市に  
ある宮殿。

六月二十八日、朝來暖煙軽く揚りて、曉風爽なり。市街は各國の國旗を以て美々しく飾られ、幾組となき行列、ビーブラフランセーを唱へて旗を振りつゝ、市中をねり歩き、自働車の如きも、亦思ひくゝに装を凝したり。憶へば過去五箇年の間、砲彈の音に、敵機の襲來に、心膽を寒からしめし事も幾度ぞ。今や乾坤一轉して、藹然たる瑞氣の搖曳するを見る。巴里人の今日の喜や、實に想察するにあまりありといふべし。

此の日ヴェルサイユ宮附近の混雜は名狀すべからざるものありしが、宮殿正門前の大通は帚目正しく掃清められ

ルイ十四世の建てたもので、世界第一の立派な宮殿といはれてゐる。

控ふる

クレマンソン

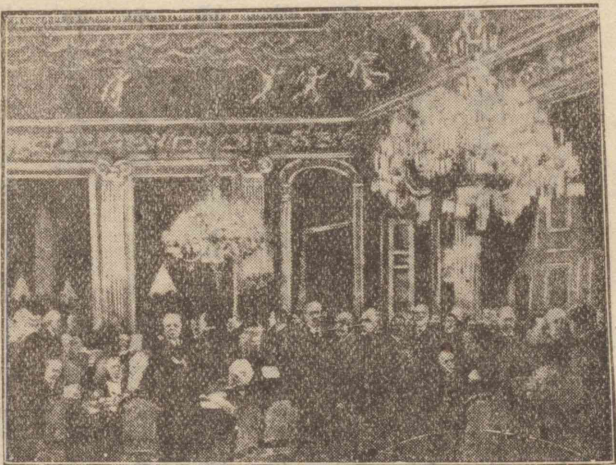
佛國の首相。  
ウイロンソン  
米國大統領。  
ロイドジョー  
英國の首相。

て一切の通行を禁じたれば、一點の塵をも止めず。兩側に堵列せる共和衛兵の銀色の兜と白き鹿革の袴下と黒く光れる長靴とは、光彩陸離として莊重なる此の日の儀式をいやが上にも莊重ならしめたり。午後三時、各國全權委員は皆已に入場し、招待を受けたる人々及び新聞記者等も亦處狭きまでに詰込みて、さしにも廣き鏡の間も、些の餘地だになかりしが、今や近世の歴史に最も光輝ある儀式を前に控ふる事とて、流石に咳一つ聞えず、滿場靜まり返れり。

見渡せば庭園に面して置かれたる長き卓子の中央にはクレマンソン氏例の如く椅子に深く腰をおろし、向つて左にはウイロンソン大統領を始として米國委員、次に伊太利委員、次に白耳義委員あり、又ク氏の向つて右にはロイドジョ

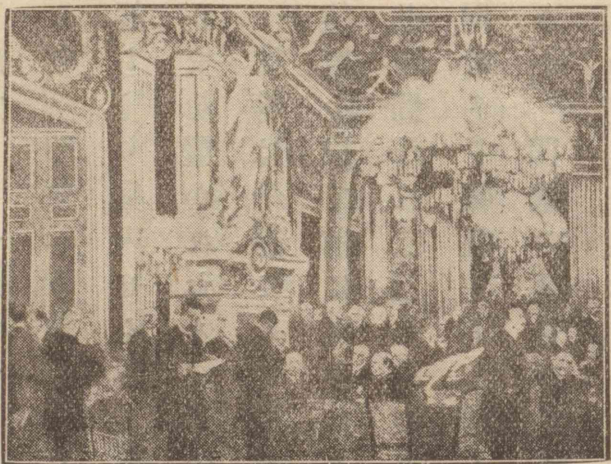


西園寺公爵  
西園寺公望



講 和 會 議

ージ氏を始として、英本國委員、次に英植民地委員、次に我が日本の委員西園寺公爵を始め、順次に居流れたり。何れも黒のフロツクコート姿にて、華麗眼をそばだてしむるものとは一も見當らざりき。更に眼を轉じて窓外を望めば、正面の有名なる噴水池の周圍には、共和衛兵圓陣をなして整列し、其の背後には、特に今日に限り庭園まで入るを許されし幾千の人



講 和 會 議

人堵の如く並びて、調印の終るを今や遅しと待構へたり。午後三時を過ぐるこゝと五分、向側の扉は開かれて、滿場の視線一時に其の方に注がるゝや、やがて二名の獨逸委員は幾多の佛國將校に見守られつゝ、入場し來れり。先なるは新外相ミュラー氏にして、後に續けるはヘル氏なり。何れもフロツクコートを着し、稍俯向き勝に極めて物靜なる態を粧ひつゝ、



日本委員の隣なる定め席に着けり。席定まるや、クレマンソー氏は徐に立ち、先づ獨逸委員より、調印すべき旨を告ぐ。茲に於て獨逸委員等はやをら立ち上り、案内せらるゝ儘にクレマンソー氏の直前、條約の正文を置かれたる卓子の前まで歩を運べり。彼等は平靜にして殆ど何等の痛痒をも感ぜざるが如き態度を以て前に進み、代るゝ條約の正文に署名したり。其の間僅に二三分時のみ。嗚呼幾百萬の人命と幾千億の財貨とを犠牲として、漸く贏得たる最後の結果はかくの如きか。獨逸の運命はかくして定まり了んぬ。見よ自席に歸り行く二人の黒き姿の淋しくも憐なるを。之れを彼の五十年の昔、同じ此の大廣間に於て、ウイリヤム老帝がビス

了んぬ

ウイリヤム老帝  
(獨逸の英主。1797—1888)

ビスマルク  
獨逸の大政治家。1815—1898

モルトケ

獨逸の名將。1800—1891

マルク・モルトケを始め、雲の如き賢臣・名將に圍まれつゝ、威風堂々として四邊を壓倒したりし當時と對比し來れば、何人か心中無限の感慨に打たれざるものあらんや。

獨逸委員の座に復するや、ウイ  
ルソン氏先づ座を立ち、續いて四  
名の米國委員之れに従ひ、同じ卓  
子に至りて署名せり。次にはロ  
イド、ジョージ氏を先登として英  
本國委員、次に英植民地委員、次に  
佛國委員、次に伊太利委員、次に日本委員の順序にて、各一團



殿宮ユイサルエヴ



山東問題  
日本が獨逸の租借權を繼承して經營し、青島を支那の還附する事、その間に

肅然  
つゝしみて。

づつ代るづつ其の卓子に於て署名し、かくて最後のウルグアイ委員に至る迄、時を費すこと四十三分、調印を了したる國々は、山東問題に關する要求の容れられざりしを理由として之れに加はらざりし支那を除き、凡て二十六個國、調印の全く終りしは午後三時四十九分なり。  
是に於てクレマンソー氏肅然として起立し、莊重にしかも簡單に宣言して曰く、「平和は今や成れり」と。此の時世界に類なしと稱せらるゝヴェルサイユ宮庭園の大噴水は一齊に迸り出で、殷々たる百一發の祝砲は、宮殿の内外に蝟集せる幾十萬の人々の歡呼の聲と相應じて、新なる世界の出現を祝しぬ。(戰後歐米見聞録)

二〇 狂歌

○

栗柯亭木端

世の中は何のへちまと思へども

ぶらりとしてはくらされもせず

○

唐衣 橘洲

菜もなき膳にあはれは知られけり

しぎやき茄子の秋の夕ぐれ

○

藤のまん丸

鬼は外福は内へと煎豆に

花さく春をまつ年のくれ

○

花道のつらね

樂みは春の櫻に秋の月

心なき身にも  
あはれは知ら  
れけり  
つづの秋の夕  
暮(西行)



四方赤良(寛延二年)江戶に生る。本名は延生。大田草。號す。蜀山。人とも云ひ。寢惚先生ともいふ。狂歌界に最も名あり。

夫婦仲よく三度くふめし

四方赤良

生酔の禮者を見れば大道を

横筋かひに春は來にけり

世の中にかほどうるさきものはなし

文武というて夜もねられず

逸名

わが家に人の來るこそうるさけれ

とはいふものゝ貴様ではなし

つむり光

ほとゝぎす自由自在に聞く里は

酒屋へ三里豆腐屋へ二里

山路愛山  
静岡縣の人。  
史學評論に名  
あり。大正六  
年歿す。

赤穂  
播磨國赤穂郡  
城主は浅野  
匠頭長矩。

恂々  
憂ひ懼るゝこ  
と。

二二 大石良雄 其の一 山路愛山

赤穂の城下は早馬の爲に大騷となりぬ。江戸城中刃傷の報藩邸に達するや、早水藤左衛門、茅野三平は直ちに馬に跨がりて日に行くこと三十里、五日にして赤穂に達し、變を國老大石良雄に報じたるなり。長矩自殺の命下るや、原惣右衛門、大石瀨左衛門は更に同じ早さを以て赤穂に達したり。君家事あり、衆情恂々、危機は始めて英傑を呼出せり。門閥に於て國中たぐふ者なく、而も温厚にして庸愚なるが如き大石良雄は、こゝに始めて彼の器局を知られたり。晝行燈の綽名を蒙りて、久しく光を韜める彼は、衆人に驚異せられぬ。



赤穂城中の會議は開かれたり。事情は愈、明白になりぬ。大野黨の一團は隱然として分れぬ。大野九郎兵衛は良雄と同じく赤穂の家老にして、長矩に寵用せられ、且年老いて事に慣れたりしかば、班は良雄の下に在りしが、勢力は却つて大なりき。彼は専ら幕府の命に恭順すべきを唱へて、成るべく溫和に城を明渡さんことを主張せり。然れども血氣に逸る藩士等は、彼を以て卑劣なり、不忠なりとし、上使を引受け、城を枕にして潔く討死すべしと唱へ出せり。良雄は言へり。「まづ主君の弟大學頭長廣君をして、主君の後を嗣がしめんことを幕府に乞ふべし」と。越えて二日、城中の會議は復開かれたり。良雄は前説を繰返せり。大野は異議を述べたり。人々は多く良雄の説

左祖  
味方をするこ  
を祖に衣  
をぬぎて肌を  
あらはすこと

大垣侯  
今の大道市。  
城主戸田采女  
正は長矩母方  
の従弟。

四月  
元祿十四年。

に左祖せり。大垣侯戸田采女正は、大學頭を立てんと請ふことの、却つて幕府の怒を招くに過ぎざるべきを報ぜり。逃亡は始れり。四月十九日大野は遂に遁逃せり。人は滅ぜり。籠城は遂に行ふべからずなれり。老人は殉死の議を唱へ、青年は復讐の論を主張せり。良雄は復讐の説を執れり。復讐の説は勝てり。血判に與る者百十餘人、其中江戸より來つて難に投ずる者僅かに十八人。道路は清潔にせられたり。人民は警められたり。四月十八日赤穂城の上より、受城使の來るを望まれたり。藩士の血は沸けり。良雄は極力彼等をして靜肅ならしめたり。城中より城外へ使者は往返せり、翌日城は難無く明渡され



山科  
山城國宇治郡

上杉氏  
羽前國米澤侯  
吉良家の親戚

采邑  
知行地

たり。何事かあるべしと待設けたる世人は、赤穂藩士の餘りに溫和なるに驚きたり。良雄は京都の山科に住して優游自適せり。田園を買ひ、居宅を營みて永住を粧へり、彼はかくの如くして身を四通五達の地に置き、天下の視聽を集め、自ら晦まして上杉氏の謀者を欺けるなり。謀者は雙方より出されたり。上杉氏は良雄を京都に偵察せしめ、良雄は吉良氏を江戸に偵察せしめたり。上杉氏は吉良氏を保護することに努め、人を遣はして吉良氏の邸を守らしめ、且其の采邑の人に非ざれば、婢僕に用ふること無からしめき。是を以て吉良氏の事情を探るは極めて難かりき。年は暮れぬ。記憶すべき三月十五日は再び來りぬ。赤

四條河原  
京都加茂川の  
四條通邊の河  
原。夕涼に出  
づる處なり。

吉田兼亮  
通稱忠左衛門  
一黨の古老に  
して、長雄に  
代りて江戸の  
領たりき。

穂の華岳寺は市民の手向くる香火に煙りぬ。良雄は在京の同志を集めて、先君の忌祭を修めぬ。かくて花は謝し、鶯は老いて、四條河原の夕涼に都の群衆雜沓する頃となりぬ。腰拔、賣國、破廉耻の誹謗は愈、良雄の頭を壓せり。而も彼は恬として關り知らざるものゝ如し。

忽ち飛報あり、江戸の吉田兼亮より來る。曰ふ、七月十八日長廣藝州に預けられたりと。一縷の望は絶えぬ。此の時まで義氣金鐵の如く見えし同盟は、弛み初めたり。眞に復讐の志なく、長廣に因りて君家の或は再興せられんことを希望せる人々は、漸く血判を悔い始めたり。或者は久しく音信を絶ち、或者は遁逃せり、良雄は盟書を同志に還して、亦復讐の念なきを示せり。同志の過半は憤激せり。良雄



外舅石束氏  
但馬出石の藩士。外舅は妻の父をいふ。

良金  
通稱主税、年十五

本所の邸  
江戸本所松阪町。今の相生町邊なりと謂ふ。

麻布  
江戸麻布我善坊。今徳川頼倫侯邸。

は是に於て彼等に其の眞意を語れり。而して最も堅固なる最後の同盟は成れり。此の年十月に至つて、良雄は妻と二人の幼兒とを外舅石束氏に託し、獨り長子良金を携へて江戸に向ひぬ。

二二 大石良雄 其の二 山路 愛山

吉良氏の防衛は猶密なりき。彼は其の本所の邸を以て卑濕なりとし、之を修補するまで、麻布なる上杉氏の別邸に住へり。これ彼が刺客を避くる計なりき。同盟は復讐に急げり。殊に老いたる人々は餘命のおぼつかなきを以て、早く事を濟さんと欲せり。或者は寧ろ白晝公然、吉良氏を襲うて一死を賭せんと欲せり。而も良雄は聽かざりき。

池上  
今は神奈川県橋樹郡。日蓮宗本門寺の在る地。

横川宗利  
通稱勘平。

良雄父子は直ちに江戸に入ることを敢へてせざりき。彼はまづ池上の平間村にありて、吉良氏の動靜を覗ひ、十一月五日に至つて、漸く江戸に入れり。父子は變名して垣見五郎兵衛、同佐内と名乗りぬ。年少なる良金は始めて江戸を見たりしなり。

十二月に至つて、吉良氏の邸は成れり。而して夜々怪しげなる青年は之を窺へり。彼等は何處より來り、何處へ去るを知らず五更に至つて、他の一隊と交代せり。さすがの吉良氏も之に氣付かざりき。しかも間諜、探偵すべて効を奏せず。秘密は却つて吉良家へ出入する茶道より、同盟の一人横川宗利に漏れたり。義央の邸に歸るべき日は明らかになりぬ。復讐の日は即ち定まりぬ。



淺野長澄  
長矩の室の實  
家。佛後國三  
次城主。

筆蹟  
祖父内藏助當  
家へ被召出候  
に十五六之候  
候様に承及勤  
其様に御覺候  
御肝煎に御覺  
御出候に御覺  
卯月七日内藏  
大石無人中  
人々御中

十二月十三日に至つて、良雄は卒然淺野長澄の邸に至りて、長矩の後室瑤泉院夫人に謁し、主家の預り金を會計して

一但火の事あるもいとど

その事とては思はれぬ

ふみみまも西の事とて

いづれも此の事とて

かゝる事  
ある事  
血

大石良雄筆蹟(帖雲瑤)

其剩餘を還せり。しかも彼の一事は猶秘して語らざりき。蓋し夫人は夙に賢を以て藩士に欽仰せらる。去年の變、大學頭長廣は老中の命を受け、取る物も取敢へず、走り還つて夫人に告げたり。夫人は少しも驚かず、徐に問へり。「仇人は誰にして、其の生死は如何」と。長廣は義央の死生を知らざりき。夫人は曰へり、更に登城

泉岳寺  
今も東京芝區  
高輪に在り。

鬪諍叫喚  
あらそひわめ

鹵簿  
行列をいふ。

して後、再びわれを訪はれよ。兄死して、弟たる者仇の存亡を知らざることや、はあ。と。かくて夫人は終身長廣に會はざりき。

翌十四日の朝、良雄は泉岳寺に至りて長矩の墓に謁し、三百金を寺僧に寄せて去れり。

此の夕、雪霏々たり。同盟者は漸く集れり。火事装束せる四十七個の人物は、三隊に分れて吉良邸の三面を圍めり。笛聲は雪夜の寂寥を破れり、鬪諍叫喚の聲は聞えたり。既にして再び笛は鳴れり。火事装束せる四十七個の人物は吉良邸を出去れり。夜景は初の寂寥に返れり。

雪霽れて、夜も亦明けたり。例の如く十五日を祝すべき登城の諸侯と武士とは、城をさして鹵簿を急げり。忽ち聞



富森正因  
通稱助右衛門

く、路人の喧嘈なるを始めて知りぬ。赤穂の浪士が吉良氏の邸を襲うて義央の首を獲たりと。風説は區々たり、飛語は紛々たり。曰く吉良氏を襲ひしものは獨り四十七人に止らず、此の外猶黒装束を爲せる百二三十人ありて、吉良氏の門外を圍みたり。曰く、上杉氏の兵は四十七人を追撃せり。曰く、淺野氏と上杉氏と相鬪はんとすと。良雄は吉田兼亮、富森正因を大目付仙石伯耆守の第に遣りて事實を報せしめ、同志相率ゐて泉岳寺に至り、義央の首を長矩の墓に供し、祭文を讀んで其の志を告げ、靜に官裁を待てり。寺は三斗の酒を置きて壯士を勞へり。人あり曰ふ、上杉氏の衆至る」と。良雄は同志を戒めて防禦の備を爲せり。而して上杉氏の衆は終に來らざりき。

此の日良雄等は仙石氏の第に招かれ、細川(熊本)、久松(松山)、毛利(長府)、水野(岡崎)の四家に預けられたり。良雄は他の十六人と共に細川氏に、良金は他の九人と共に久松氏に。元祿十六年二月四日、四十六人は死を賜はれり。細川綱利は良雄等に訣別の盃を賜へり。良雄は他の十六人と共に、幕府の檢使の前に自裁せり。

良雄は外濫藉にして内に枉ぐべからざる意志を有したりき。彼は何事も打靜めて、騒がしきことを嫌ひたりき。彼は如何なる場合にも、長者たる品位を失墜せざりき。然れども彼は徒らに平和を愛するものに非ず。なすべき事は必ずなし遂げ得べき主一と堅忍とを有したりき。彼はストア學者の表面と戰國武士の裏面とを有したりき。彼

ストア學派  
西洋古代の一學派



は愛すべくして狎るべからず、畏るべくして嫌ふべからざる人なりき。彼が同盟の首領として成功せし所以のもの、職として此の品性ありしに由れり。

大町桂月  
前出。

二三 義士泉岳寺へ引揚ぐ(自修文) 大町桂月

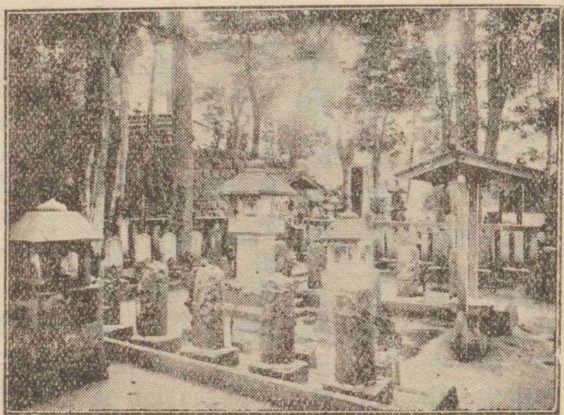
上野介の首は獲たり。四十七士の志は遂げたり。吉良邸の裏門にて銅鑼を鳴らして人員を點するに、一人も缺くるものなし。上野介の首を擁し、隊伍を整へて回向院に至り、休息せんとせしに、住持拒んで入れず、止むを得ず泉岳寺さして繰出す。飽く迄も落着きたる態度なり。

かばかり落着きてもなほ一つ手ぬかりあり、吉良邸の燈火を消すを忘れたる事なり。火事が起こりては大事なりとて、内藏助これを大高源吾富森助右衛門の兩人に命ず。これには餘程の膽勇を要する事なり、而してこれ大石主税の發言に係かれりとも傳へらる。

かくて火事の起る心配は無し。追兵の心配はあれども、悠々として追ら

ざるは、さすがに義烈無雙の四十七士なり。

兩國橋は渡らずに、隅田川の左岸を下りて永代橋を渡り、鐵砲洲を経て芝



泉岳寺穂義士墓

の通に出で、汐留橋を渡り、まぎれもなき一筋の順路を行く。されど追兵は來らず。伊達屋敷の前を過ぐ。吏遮りて狀を問ふ。答ふるに實を以てす、吏止めず。無事に泉岳寺に至り、上野介の首を井戸の水に洗ひ、三方に戴せて、内匠頭の墓前に供へし時の心中や如何なりけん。その井戸、首洗井戸と稱せられて、今もなほ義士の墓前にあり、いと淺き井戸なり。内匠頭の墓前に一同香を供へ、各自ら名乗りて拜謁す。終はりて、内藏助進んで短刀を墓上に置き、その刃を外にむく。かくて祭文を讀上ぐ。

元祿十五年午十二月十五日、唯今面々名乗り申す通り、大石内藏助始め、足



御生害  
御自殺。

螳螂の斧  
かまきりが斧  
なふりたて  
車の通路をく  
ひこめる如く  
自分の力を大  
敵からずして  
ふに當るない

輕寺阪吉右衛門迄都合四十七人、死を盟ひし臣等謹んで亡君の尊靈に告げ奉り候。去年三月十四日、尊君、上野介を御刃傷遊ばされし御事、私共その仔細存じ奉らず。然る所尊君御生害、上野介殿御存命。御公裁の上、私どもかくの如きの企、尊君の御心にあらず、却て御怒り入り奉り候へども、私等ども尊君の祿を食み、俱に天を戴かずの義もだし難く、共に地を踏まざるの分捨て難し、而して晝夜艱難仕候。恥を抱き相果て候ひては、泉下に於て申上ぐべき詞これなく候。よつて御意趣を繼ぎ奉るべくと存候より、今日を相待つこと一日三秋の思に御座候。四十七人の者ども雨に臥し、雪にたゞすみ、一日二日に漸く一食仕候。老衰の者、病身の輩はしばし死をすゝめ候へども、螳螂の斧を頼むの笑を相招き、いよく以て尊君の御恥辱を相殘し申すべきかと存じ奉り候へども、止むことを得ず、昨夜申合せ上野介殿御宅へ推參仕り、即ち上野介御供申し、これ迄參上仕候。この協差は尊君先年御祕藏、我れ等へ下し置かれ候、只今進獻仕候。御墓の下、御尊靈これあるに於ては再び御手を下されて御鬱憤をはらし給へ。右の趣四十七人一同申上候。

義士一同みな涙を流す。一篇の結末ことに哀痛なり、千載の下なほ讀者をして泣かしむ。(四十七士)

### 二四 法律と裁判

坂谷 芳郎

阪谷芳郎  
東京の人、東  
大出身、文學  
士、法學博士  
男爵、貴族院  
議員。

放肆  
わがまま。

立憲國民の特權は、自由の天地に呼吸するにあり。然れども、自由とは何ぞや、決して無節制を意味するにはあらず。否、無節制と放肆とは、自由と兩立し能はざるものなり。何となれば一人の無節制と放肆とは、他人に迷惑を及ぼし、他人をして不自由に陥らしむべければなり。人間は決して孤獨なる能はず、必ずや、社會の一分子たり、國家の一要素たらざるを得ざるものなれば、或程度までは、自ら節制して國家社會の秩序に従はざる可らず。他人が極端なる自由を望み、無節制に陥りて秩序を害するを不便とせば、己も又國



家社會の一員として其の秩序を亂さざるやうに努むべきなり。

然れども人間は兎角自由に流れ勝ちなり。一人が自由に振舞へば、多くの人の自由奪はれ、各人の間に權利の平等を得ざるべし。自由と平等とは衡の如く、自由極端に重んぜらるれば、平等を缺き、平等極端に重んぜらるれば、自由を缺く、此の間の均衡を保つものは即ち法律の力なり。而して又社會には幾多の惡漢ありて善良なる國民の權利を侵害し、社會の平和を亂すもの多し。是に對して制裁の規定を設け、社會に於ける不良の分子を排除すると共に、善民の權利を保護するの必要ありとす。而して是れ又法律の力に俟つなり。

されば法律とは、社會の秩序を規定するものに外ならずしてとりも直さず、吾等が構成せる國家の意志なれば、吾等は是を尊重する事を忘る可らず。即ち憲法に於ては國家構成の最高基本を定め、民法・刑法・商法其の他幾多の特別法ありて、權利義務の規範一切是に據らざるなく、その規定あるを知ると知らざるとに關せず、國民は是が適用を受くるなり。

既に法律あれば、是が遂行を爲すものなかる可らず。裁判官は即ちその職務を有するものにして、その身分は司法大臣の支配にあるものなれども、職分は全く獨立して終身官たり。如何なる權威も彼を動かすこと能はず、その裁斷を下すに當つてや、法律の規準に據り、正理の源泉たる天皇



の名を以てするなり。

我國今日の制度によれば、區裁判所・地方裁判所・控訴院・大審院の四者を通常裁判所と名く。區裁判所と地方裁判所とは、各地に其數多く、控訴院は東京・大阪・名古屋・廣島・長崎・仙臺・函館の七箇所にある。大審院は東京にのみ存せり。若し我等が正當の權利を侵害せられたりと思惟する時には、遲疑する事なく、事件の性質によりて、先づ區裁判所又は地方裁判所に訴へ出づべし。若し第一審の判決にして満足すべからざる時には、始め區裁判所に訴へ出でたるものは地方裁判所に、地方裁判所に訴へ出でたるものは控訴院に訴へ出づべく、尙第二審の判決に満足せざるものは、更に大審院に訴へ出づべきなり。大審院は最終審にして、其の判

決に不満あるも、これに従ふの外なく又従はざる可らざるを國民の義務とす。普通裁判所の外に特別裁判所の一たる行政裁判所あり、前者は隣人同志の係争を處理し、後者は専ら行政官と人民との係争を處理する處なり。行政官は公共の安寧と秩序と人民の幸福とを増進する爲に便宜の經理と處分を爲すを本分とすれども、素より千百の措置總てに於て人民の満足を買ふ能はざる事もあるべし。國家は人民が此の際に取り得べき制度を開きて行政裁判所を設けたるなり。

國民が國家の意志たる法律の判ずる處に従はざる可らざるや、前にも是を述べたれども、裁判の進行に當りては、被告も辯護士によりて十分其の事情を陳述し、權利を主張し、



判決に對して、豫め判事の反省を求め、裁判の正當を期するを得べく、是れ又立憲國民の恩典なりといふべし。

(東京市民讀本に據る)

○漢文

元就の大志

賴

襄

毛利元就、幼有器量。嘗詣嚴島神祠。既歸、問從者曰、「汝輩何祈。」曰、「祈郎君主安藝也。」元就曰、「汝盍祈吾主天下。夫願主天下者、能主一方。願主一方者、能主一國。今願主一國矣。其所成可知已。」聞者奇之。後元就果領山陰、山陽十三州。

毛利元就  
安藝の人、吉田郡山城に居る。元龜二年卒す。年七十有五。

郎君  
若旦那。

大槻清崇  
磐溪の號す。仙臺の人、明治十一年卒す。

糾音「キウ」  
「アツメル」

隆景  
小早川氏を嗣ぐ。

兄弟之爭必起於欲

大槻清崇



元就病將死。致諸子於前、呼取箭數條、一如其子之數、乃手自糾爲一束、極力折之、不能斷也。單抽其一條、隨折隨斷。因戒曰、「兄弟猶此箭也。和則相依、濟事、不和則各敗。汝等銘心勿忘。」次子隆景進曰、「夫兄弟之爭、必起於欲。棄欲思義、何不和之有。」元就悅、顧餘子曰、「宜從仲兄之言。」



廣瀨旭莊  
澁窓の詩人。  
久三年卒。文  
年五十七。  
菅茶山  
名は晉帥、備  
後神邊の人。詩  
を以て鳴る。文  
政十八年歿  
す。年八十。

茶山寛厚

廣瀨旭莊

菅茶山先生疾病、余坐側。先生呼藥、竈下無火。家人徐  
徐吹之。余不堪其遲、將起而赴之。先生曰、止。某既命  
矣。孥輩不敢遲之。若再、彼將惶愕失措。然則更遲矣。  
其待家人、寛厚如此。余雖無疾時、不能少忍。爾後宜  
想古人所以書百忍字也。

刻苦研學

齋藤拙堂

阪井虎山、安藝人也。幼而俊異、在巽讀書、督學賴春  
水見而奇之、期以國士。刻苦研業。家貧、躬服薪春之  
勞、以養其親。且春且讀。嘗語人曰、吾誦離騷一遍、米

齋藤拙堂  
伊勢津の人。  
慶應元年卒す。  
阪井虎山  
名は華、嘉永  
三年卒。嘉永  
は廣島饒津公  
園内に在り。  
賴春水  
山陽の父。  
離騷  
屈原の著。

乃白矣。夜讀達旦、倦則據几坐睡。未嘗就衾褥。比壯  
歲、學已成。賴山陽自京師歸省、與之論文、嘆稱以爲  
文中之傑。(修刪)

賴山陽 刪修

菊池純

賴襄、字子成、通稱久太郎、號山陽外史。安藝竹原人、  
賴惟完之子。其入京、寓于木屋街。以其近望東山、又  
號三十六峰外史。爲人高躡蹙眉、眼采炯炯、望之有  
威。性峻峭、以氣節自持。未嘗屈己隨人。其去國、誓曰、  
「已不能仕父母之國、不復著朝服、見貴人。」文政六年、  
買家三本木、稱水西莊。庭中雜植梅花竹樹、又置一

菊池純  
三溪號す、  
紀伊の人、明  
治二十四年卒  
す。  
賴惟完  
春水。  
高躡蹙眉  
頰骨が高く眉  
間の通れるを  
いふ。  
眼采炯々  
眼光のきらぎ  
らさかりか  
やくないふ。  
峻峭  
氣の厳しさを  
いふ。  
父母之國  
藝州廣島ない  
ふ。



復、通稱復三  
樹三郎、通稱三  
日本外史  
二十二卷  
日本政記  
十六卷  
通議  
三卷  
日本樂府  
一卷  
定信、樂翁と  
號す。



小草堂。臨鴨水。對東山。稱山紫水明處。天保三年六月、患咯血。時方著日本政記。乃日夜勉強構稿。曰、我必欲成之。而入地。及秋、疾益劇。以九月二十三日、歿于家。時年五十三。葬于東山長樂寺。其住京師、娶小石氏。生二子。曰復、曰醇。生平所著、日本外史、日本政記、通議及日本樂府等無慮數十卷。外史之成、凡經二十年。脫稿。猶祕之家。白河城主松平定信、聞之、卑辭厚幣、以請之。自是外史之書大行于世。初、襄在於京師。聲名重於一時。四方文士

游京者、爭來求見、非不得已、則一切謝絕。平生耽讀書、勤著述。常語人曰、謂我才子、未悉我者也。謂我能刻苦者、真知我也。識者以為知言。

格言

- (一) 子曰。德不孤。必有隣。(論語)
- (二) 責善朋友之道也。(孟子)
- (三) 富潤屋。德潤身。心廣體胖。(大學)
- (四) 天下之本在國。國之本在家。家之本在身。(孟子)
- (五) 積善之家。必有餘慶。積不善之家。必有餘殃。(易經)
- (六) 子曰。君子病無能焉。不病人之不已知也。(論語)

歿  
はわざ



七) 子曰。主忠信。毋友不如己者。過則勿憚改。(論語)  
 (八) 子貢問曰。有一言而可以終身行之者乎。子曰。其恕乎。己所不欲。勿施於人。(論語)

題常磐抱孤圖

梁川 星巖

雪滿笠檐風捲袂

呱呱索乳若爲情

他年鐵榜峰頭嶮

叱咤三軍是此聲

宿生田

菅 茶山

千歲恩讎兩不存

風雲長爲弔忠魂

客窗一夜聞松籟

月黑楠公墓畔村

冬夜讀書

菅 茶山

呱呱  
 赤子の泣く聲  
 即ち牛若の泣く  
 泣くをいふ  
 他年云々  
 牛若成長の後  
 鐵榜峰頭の嶮  
 を下りて大軍  
 を指揮せしむ

收乱帙云々

机邊に散りたる  
 書帙を收拾し  
 書中の疑義を  
 書き留めしむ  
 青燈の下の心  
 を上萬年の間  
 も言はぬ興味  
 あり

謙信不識庵  
 號す信玄法  
 名を機山とい  
 ふ。大牙、主將の  
 旗

賴杏坪  
 山陽の叔父、  
 天保五年卒す  
 年七十九

雪擁山堂樹影深

檐鈴不動夜沈沈

泉岳寺

阪井 虎山

閑收亂帙思疑義

一穗青燈萬古心

山嶽可崩海可翻

不消四十七臣魂

題不識庵擊機山圖

賴 襄

墳前滿地草苔濕

盡是行人流涕痕

鞭聲肅肅夜過河

曉見千兵擁大牙

遺恨十年磨一劍

吉野懷古

一

賴 杏坪

遺恨十年磨一劍

流星光底逸長蛇



延元陵  
後醍醐帝陵。

藤井竹外  
高槻藩士、  
應二年卒、  
六十。

河野鐵兜  
播磨人。

桂林莊  
淡窓の塾舎の  
名。  
廣瀨淡窓  
豐後日田人、  
安政二年卒、  
年七十四。

萬人買醉攪芳叢。

感慨誰能與我同。

恨殺殘紅飛向北。

延元陵上落花風。

二

藤井竹外

古陵松柏吼天颿。

山寺尋春春寂寥。

眉雪老僧時輟帚。

落花深處說南朝。

三

河野鐵兜

山禽叫斷夜寥寥。

無限春風恨未消。

露臥延元陵下月。

滿身花影夢南朝。

桂林莊雜詠示諸生

廣瀨淡窓

休道他鄉多苦辛。

同袍有友自相親。

同袍  
親しき友をいふ。

柴扉曉出霜如雪。

君汲川流我拾薪。

再訂新青年讀本 卷三 終



附 録

一 變體假名

(あ)あ	(い)い	(う)う	(え)え	(お)お
(か)か	(き)き	(く)く	(け)け	(こ)こ
(さ)さ	(し)し	(す)す	(せ)せ	(そ)そ
(た)た	(ち)ち	(つ)つ	(て)て	(と)と
(な)な	(に)に	(ぬ)ぬ	(ね)ね	(の)の
(は)は	(ひ)ひ	(ふ)ふ	(へ)へ	(ほ)ほ
(ま)ま	(み)み	(む)む	(め)め	(も)も
(や)や	(り)り	(ゆ)ゆ	(れ)れ	(よ)よ
(ら)ら	(る)る	(る)る	(れ)れ	(ろ)ろ
(わ)わ	(わ)わ	(を)を	(を)を	(を)を

二 國語假名遣ひ一覽

(い)あさい(朝寢)おいかげ(綾)かひ(權)かひ ぞへ(介添)おほいに(大)さいづち(小槌) かうがい(筭)さいさい(后)さいたま(埼玉) さいはひ(幸)たいまつ(松明)ついたり (朔)ついで(序)ついたら(衝立)やいば (刃)ひいき(最良)むいか(六日) 以上名詞ノ類	(い)おい(老)くい(悔)ついはむ(啄)ひいづ (秀)むくい(報)……………以上動詞 ゆいて(行)およいで(泳)しろい(白)ナド きき・し・いニ變ルモノハ凡テ此イテ用フ	(い)の(居)の(猪)の(こ)の(家)の(亥)いぬの (乾)の(蘭)の(井)の(堰)の(も)り(蝶)の の(ざ)り(壁)の(ろ)り(爐)の(し)き(臂)あ (藍)くれなる(紅)あぢさる(紫)陽花(く)わ (慈)姑(くら)の(位)の(な)か(田)舎(も)と (基)なる(地)震(か)たる(食)うなる(髻) 髪(ま)との(團)樂(と)の(宿)直(つ)の(對) は(ら)る(せ)(復)怨……………以上名詞 ある(居)ひ(き)ある(率)ま(る)る(參) 以上動詞	(ひ)以上ノ外ハ「ひ」但シ語ノ上ニアルモノ ハ凡テ「い」
---	---	--	---------------------------------

(う)あきうど(商人)いもうと(妹)おとうと (弟)かうがい(筭)かうべ(神戶)かうづけ (上)野(かう)し(格子)かうぢ(麴)こうぢ (小)路(し)うと(舅)しうとめ(姑)たうげ (峠)てうづ(手)水(は)うき(伯)耆(帯)ひう が(日)向(ひ)やうし(拍)子(ふ)うふ(夫)婦(ほ) う(反)故(かう)ぶり(冠)かうち(河)内(こ) う(紺)屋(な)うし(直)衣(お)うな(嫗)た う(が)み(疊)紙(や)うか(八)日(や)うやう(漸)	(う)う(植)すう(据)まうで(詣)まうく(設) まうす(申)つかうまつる(仕)奉 以上名詞ノ類	(う)ならうて(習)とうて(問)きをうて(競)た かう(高)おもう(重)ゆかう(行)かかう (書)ノ如クひ・く・むノうニ代ルモノハ 皆うト知ルベシ	(ふ)以上ノ外ハ「ふ」
--	--	--	-------------



(を)を(芋)を(麻)を(緒)を(尾)を(雄)を(牡)を  
(峰)を(こ)男(夫)をか(岡)を(陸)を(け)を(桶)  
を(さ)箴(箴)をし(ご)り(鴛鴦)を(ち)遠(遠)を(ん)  
な(女)を(と)ひ(一)昨日(一)を(と)ひ(一)昨  
年(一)を(と)め(少女)を(ち)伯(叔父)を(ば)伯  
叔母(を)ひ(甥)を(ち)老(翁)を(さ)な(ご)稚  
子(を)とり(媒鳥)を(ぎ)荻(を)みなへし(女  
郎花)を(の)斧(を)り(檻)を(ろ)ち(大蛇)を  
を(竿)棹(一)い(さ)を(功績)を(み)さ(を)操(う  
を(魚)か(つ)を(鯉)を(ば)せ(芭蕉)を(ご)し  
(緘)を(ぎ)を(ぎ)俳(優)を(さ)長(を)こ(愚)し  
を(ん)紫(苑)を(み)を(つ)く(し)落(標)を(を)る(類)  
を(つ)と(せい)臘(臍)を(り)滓(を)り(折)を  
し(やう)和(尙)し(を)り(菜)と(を)十(め)を(と)

エ

(え)え(柄)え(江)え(た)枝(す)わ(え)條(え)ひ(め)  
(愛媛)え(の)き(榎)ひ(え)種(み)え(外見)ふ  
え(笛)さ(え)榮(螺)な(が)え(轆)は(え)鮓(鮓)  
え(と)干(支) (え)と(ハ)ス(ベ)テ(此)え(ひ  
え)ご(り)鵜(ひ)こ(ば)え(藥)ぬ(え)鶴(す)み(の  
え)住(吉)ゆ(ふ)ば(え)夕(映)も(え)ぎ(萌)黄(黄)  
以上名詞  
あ(え)肖(お)ぼ(え)覺(は)え(榮)等(や)行(下)二  
段(活)用(動)詞(ハ)凡(テ)コ(ノ)え(以上)動(詞)  
(え)繪(え)餌(え)とも(巴)え(た)穢(多)ち(る  
(知)慧(え)ぼ(し)烏(帽子)す(る)末(こ)す(る  
(梢)え(し)や(く)會(釋)え(る)か(う)回(向)い(し)す  
る(礎)つ(る)杖(ゆ)え(る)故(え)る(く)ぼ(盤)つ(く  
る(机)こ(る)聲(え)ん(じ)ゆ(槐)え(つ)ば(笑  
壺)ゆ(え)ん(所)以(す)る(もの)陶(器)以上名詞  
う(る)植(す)る(据)え(る)彫(え)る(る)列(え)る  
ふ(醉)え(る)ぐ(し)菘(え)む(笑)え(る)が(く)畫(え)る  
ご(る)彩(え)る(づ)く(嘔)吐(以上)動(詞)  
(ハ)以上ノ外ハ(ハ)恒(シ)語(上)ニ(アル)モノ(ハ)「え」

オ

(夫婦)を(こ)痴(を)ち(こ)越(度)や(を)ら(徐)  
た(を)や(か)嬋(娟)を(さ)く(を)小(小)  
以上名詞ノ類  
を(か)す(犯)を(が)む(拜)を(さ)む(治)を(さ)む  
(修)を(は)る(終)を(し)ふ(教)を(る)居(を)る  
(折)を(め)く(叫)を(ご)る(驕)を(こ)た(る)怠(怠)  
を(ご)る(踊)を(の)く(戰)慄(か)を(る)馨(馨)し  
こ(る)萎(ま)を(す)申(を)さ(な)し(幼)を(か  
し(可)笑(を)し(雄)あ(を)し(青)を(し(愛  
し)を(し)む(惜)……以上動詞形容詞ノ類

(ほ)右ノ外語ノ中下ニアルモノハ「ほ」

(お)右ノ外語ノ上ニアルモノハ「お」

ワ

(わ)あ(わ)泡(し)わ(皺)く(つ)わ(轡)くる(わ)廓  
た(わ)ら(俵)は(ら)わ(た)臆(こ)と(わ)ざ(諺)い  
わ(し)鰯(く)わ(る)慈(姑)こ(わ)ね(聲)音(ひ)わ  
(鵜)ゆ(わ)う(硫)黄(う)ら(わ)浦(曲)は(に)わ  
(埴)輪(さ)わ(や)か(爽)た(わ)や(か)嬋(娟)た(わ  
や(め)手(弱)女(こ)と(わり)理(理)  
以上名詞ノ類  
あ(わ)つ(周)章(か)わ(く)乾(さ)わ(ぐ)騷(た)わ  
む(撓)す(わ)る(坐)よ(わ)る(弱)こ(と)わ(る  
(斷)あ(わ)た(ぐ)し(急)遽(し)わ(し)吝(吝)嗇(い)わ  
け(な)し(稚)た(わ)い(な)し(無)辨(別)

以上動詞形容詞

(は)以上ノ外ハ「は」



(ち)ち(路)すぢ(筋)うぢ(氏)ひぢ(臂)をぢ  
 (伯叔父)ちぢ(祖父)あぢ(味)あぢ(鱒)か  
 ち(鍛冶)かぢ(梶)かうぢ(麴)くじら(鯨)  
 こことち(琴柱)ひぢ(泥)ちぢみ(縮)ふぢ  
 (藤)ふぢば(かま)蘭(なんぢ)なぢ(汝)なめくぢ  
 (蛸)ねぢ(螺旋)みとぢ(三十)わらぢ  
 (草鞋)もみぢ(紅葉)ぢだんだ(地踏)  
 とぢて(閉)はぢて(恥)よぢて(攀)おぢて  
 (怖)等々行上二段活用ノ動詞ハ凡テ此ぢ  
 ちぢむさ(不潔)……以上動詞形容詞  
 (じ)以上ノ外ハ凡テ「じ」

(ず)す(鈴)す(錫)す(硯)す(碇)す(鱸)  
 す(め)雀(ね)す(み)鼠(か)す(數)あんす  
 (杏)ゆす(柚)す(わ)え(條)す(いき)芋(莖)  
 いしす(礎)こす(石)梢(は)す(み)機(す)  
 (數珠)はす(筥)きす(疵)かならす(必)く  
 す(葛)もす(百舌鳥)み(す)す(蚯蚓)す(な)  
 (菘)す(しろ)蘿蔔(す)さ(從者)ゆ(は)す  
 (弭)す(ろ)に(漫)……以上名詞ノ類  
 たたす(む)竹(な)す(ら)ふ(準)ひ(す)む(歪)す  
 (不、助動詞)す(し)涼  
 (づ)以上ノ外ハ「づ」  
 以上動詞形容詞

大正九年十二月五日印刷  
 大正九年十二月十日發行  
 大正十三年十一月五日訂正再版印刷  
 大正十三年十一月十日訂正再版發行  
 昭和三年六月十五日十三版發行

新青年讀本三

不許	複製
----	----

錢五拾五金價定

著作者 廣島縣教育會

發行者 廣島市鹽屋町 會社廣島積善館

代表者 花井卯助

印刷者 獅子吼堂

東京市麹町區飯田町三丁目十番地

發賣所 廣島市鹽屋町 振替貯金口座 大阪二〇五一番 會社廣島積善館



広島大学図書

2000068984

